宍道町埋蔵文化財調査報告 6

水　溜　古　墳　群

1988年3月

島根県宍道町教育委員会

序

水溜古墳群は、宍道湖南岸域における有数の大古墳群です。この古墳群はかつて開発か保存かをめぐって大いに論議された遺跡でありますが、関係各位の御努力、御協力により保存が決定されて今日に至っております。

さて、宍道町ではこの古墳群の一部4.5haをとり入れて「古墳の森」と称する公園造りを進行中ですが、公園整備の必要上、群中最大規模の水溜5号墳、３０号墳の発掘調査を国・県の補助を受けて実施いたしました。調査の結果、水溜５号墳は５世紀後半の一辺約２５ｍの方墳で、周囲に埴輪を廻らす二段築成の古墳であること、３０号墳は一辺約１４ｍの方墳であるとの成果が得られましたのは、水溜古墳群の性格を知ることのみならず、宍道湖南岸域の古墳文化を解明するうえで新しい展望がひらけたものと確信しています。

本書が今後の文化財保護と研究の資料として御活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり終始御指導賜りました諸先生にお礼を申し上げるとともに発掘調査、遺物整理をお世話になった皆さん、また、御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和６３年３月

宍道町教育委員会

教育長　福　田　幸　市

例　　言

1. 本書は宍道町総合公園拡張に先立ち、宍道町教育委員会が実施した水溜古墳群発掘調査の報告書である。
2. 調査にあたっては、国庫補助金、県費補助金を受けた。
3. 調　査　組　織

調査指導	島根県教育庁文化課	
	島根大学名誉教授	山　本　　清
	八雲中学教頭	蓮　岡　法　暲
	島根大学助教授	渡　辺　貞　幸
調査担当者	宍道町教育委員会主事	稲　田　　信
事　務　局	宍道町教育委員会	
	教育次長	清　原　憲　道
	社会教育主事	五百川　秀　男

4. 本書中の矢印は、磁北を示す。
5. 本書の執筆、編集は事務局の協力を得て稲田がおこなった。
6. 遺物は宍道町教育委員会で保管している。

目　　次

序

例　　言

Ⅰ　経　　過 …… 1

Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 4

Aトレンチ …… 8

Bトレンチ …… 8

Cトレンチ …… 14

Dトレンチ …… 14

Eトレンチ …… 18

Fトレンチ …… 18

Gトレンチ …… 18

Iトレンチ …… 21

Jトレンチ …… 21

Kトレンチ …… 23

Lトレンチ …… 25

Mトレンチ …… 25

Nトレンチ …… 28

Ⅳ　まとめ …… 30

挿　図　目　次

図1.　宍道町位置図 …… 2
図2.　水溜古墳群および周辺の遺跡 …… 3
図3.　水溜古墳群配置図 …… 4
図4.　水溜5号墳、30号墳トレンチ配置図 …… 6
図5.　水溜5号墳、30号墳墳丘実測図 …… 7
図6.　Aトレンチ出土遺物実測図 …… 8
図7.　Aトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 9
図8.　Bトレンチ出土遺物実測図 …… 10
図9.　Bトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 11
図10.　Cトレンチ出土遺物実測図 …… 12
図11.　Cトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 13
図12.　Dトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 15
図13.　Dトレンチ出土遺物実測図 …… 17
図14.　E、F、G、Iトレンチ土層図 …… 19
図15.　Jトレンチ出土遺物実測図 …… 21
図16.　Jトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 22
図17.　Kトレンチ出土遺物実測図 …… 23
図18.　Kトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 24
図19.　Lトレンチ出土遺物実測図 …… 26
図20.　Lトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 27
図21.　Mトレンチ出土遺物実測図 …… 28
図22.　Nトレンチ土層図及び遺物出土状況図 …… 29

図　版　目　次

図版1.　水溜古墳群航空写真
図版2.　水溜5号墳、30号墳全景
図版3.　Aトレンチ調査状況
図版4.　Aトレンチ出土遺物
図版5.　Bトレンチ土層
図版6.　Bトレンチ遺物出土状況
図版7.　Bトレンチ出土遺物
図版8.　Cトレンチ土層
図版9.　Cトレンチ石列
図版10.　Cトレンチ出土遺物
図版11.　Dトレンチ溝
図版12.　Dトレンチ調査状況
図版13.　Dトレンチ出土遺物
図版14.　Eトレンチ調査状況
図版15.　Fトレンチ調査状況
図版16.　Gトレンチ調査状況
図版17.　Iトレンチ調査状況
図版18.　Jトレンチ調査状況
図版19.　Jトレンチ遺物出土状況
図版20.　Jトレンチ出土遺物
図版21.　Kトレンチ調査状況
図版22.　Kトレンチ遺物出土状況
図版23.　Kトレンチ出土遺物
図版24.　Lトレンチ遺物出土状況
図版25.　Lトレンチ出土遺物
図版26.　Mトレンチ土層
図版27.　Mトレンチ出土遺物
図版28.　Nトレンチ土層
図版29.　Nトレンチ遺物出土状況
図版30.　Nトレンチ出土遺物

Ⅰ 調 査 の 経 過

1. 調査にいたるいきさつ

昭和５９年３月、全国和牛能力共進会（昭和６２年開催）の主会場を考えた中央家畜市場の建設の話がもちあがり、予定地の分布調査の依頼が町教委になされた。町教委では県文化課の協力を得て、分布調査を行ったが、その時、今回の調査対象となった水溜古墳群が発見され、その規模の大きさにより、事業地の変更を願った。事業地は協議の末、現在の中央家畜市場に落ち着き、昭和５９年度町教委の行った清水谷、矢頭遺跡[注1]の調査へとなるのだが、残された水溜古墳群の取り扱いが問題となり、大いに論議を呼んだ。

昭和６０年度のことであるが、たまたま水溜古墳群が宍道総合公園に隣接し、国道５４号線、広域農道にも近いことから、古墳を中心にした公園をつくろうではないかという気運が高まり、町建設課を中心に計画が具体的に進められていった。この計画では、古墳群中最大の水溜５号墳（発見時は全長６３ｍの前方後方墳とされていた）を中心とする古墳の広場、キャンプ施設をもつ古代生活体験の広場、町内外の古墳の模型からなる歴史の広場の３ゾーンを構成するもので、公園のメインとなる水溜５号墳の具体的資料が、公園の運営上、教育上必要であるとされた。町教委では、町建設課、町当局の協議を受け、昭和６２年度中に国庫補助金、県費補助金を受けて調査を行うことに決定した。

古墳は公園の一部として将来まで残るものであり、不必要な掘り起こしは避るべきであるが、資料上、古墳の墳形、規模、築造年代を明確にしたかったので、必要箇所に幅１ｍ、長さ１０ｍのトレンチを約１０本設定し、調査していくことにした。

2. 調 査 の 経 過

調査は、測量、トレンチ調査を含めて約６ケ月を予定した。まず、測量のために１０ｍ間隔の杭を設置し、５月１１日より測量調査を行った。測量図は縮尺１／100のものを作成するもので、６月４日に終了した。トレンチは設定順にＡ・Ｂ・Ｃ・・・とし、６月１５日からＡトレンチの調査にとりかかった。その後、梅雨の時期、夏の委員会業務による休止の時期を狭んで調査は１０月１４日まで続けていった。最終的にはＡトレンチから始めて、Ｈトレンチを除きＮトレンチまでの１３トレンチの調査を行ったことになる。その後、遺物洗い、トレンチの埋め戻し等を行い、１月になってから本格的な遺物整理を行った。遺物整理は、埴輪がほとんどであったので、これの実測、拓本が中心となった。

Ⅱ　位置と歴史的環境

水溜古墳群は約３０基からなる宍道町最大の古墳群である。宍道町大字白石 3254－2番地に所在するもので、宍道湖岸より南に約 1.5 km入り、南には宍道湖南部広域農道が、東には宍道総合公園が、北には島根中央家畜市場が隣接する。本遺跡の北（現在の中央家畜市場）からは、３基の墳墓からなる清水谷遺跡と弥生時代～古墳時代の住居趾や横穴墓からなる矢頭遺跡が発見されており、密接な関連を窮わせる。古墳群は約１４haにわたって分布しており、標高は低いもので約５０m、高いものは約７０mの範囲にある。現在、古墳群は山林の中に分布するもので、周囲にこれといった水田面、畑地はないが、地元の話では、かって、交通の要所であったらしく、群中を大小の道がはしっているのを確認できる。

さて、宍道町で現在までに確認されている最古の遺跡は縄文時代に遡る。大字東来待の弘長寺遺跡[注2]、三成遺跡[注3]、大字白石の伊野谷遺跡がそれであり、いずれも縄文後期～晩期にかけての土器が出土しており、特に弘長寺遺跡からは同時に石斧も確認されている。なお、先に平野部の踏査を行った時点では縄文時代に関する遺物の発見は他になく、宍道町における縄文文化の脆弱さを感じさせられる。

弥生時代になると先の三成遺跡、大字佐々布の平田遺跡、佐々布Ａ・Ｂ遺跡、など数例が確認されており、縄文遺跡に比べるとやや広がりをみせてくる。宍道の場合、大きな平野部は見られず、小さな谷水田ごとの開発が徐々に進められていったのだろう。

古墳時代にはいると、遺跡数、遺物量は爆発的に増加する。現在までに約 100 近くの古墳、横穴が確認されており、今後の調査によって益々増加する傾向にあろう。分布図を見ると、古墳時代の遺跡は町全域にまんべんなく分布しており、宍道湖岸域を中心に多数の古墳が点在する。また、来待川、鏡川、同道川、佐々布川の形成する地区ではその区域を単位とすると考えられる古墳が存在する。

律令時代になると『出雲国風土記』[注4]その様相を知り得るようになる。特に宍道に関する記載の部分には、宍道の地名伝承や、当時の人々の精神文化を知り得る「犬石、猪石」の記述があるが、現在も風土記の記述どおりの石が存在する。また、現在の宍道町が健部郷（たけるべのさと）、拝志郷（はやしのさと）の一部と宍道郷より成ることや、大字佐々布字佐々布下付近には宍道駅（ししぢのうまや）が置かれていたことが知られており、当時の社会構造の一部を垣間見ることができよう。

図 1.　宍道町位置図

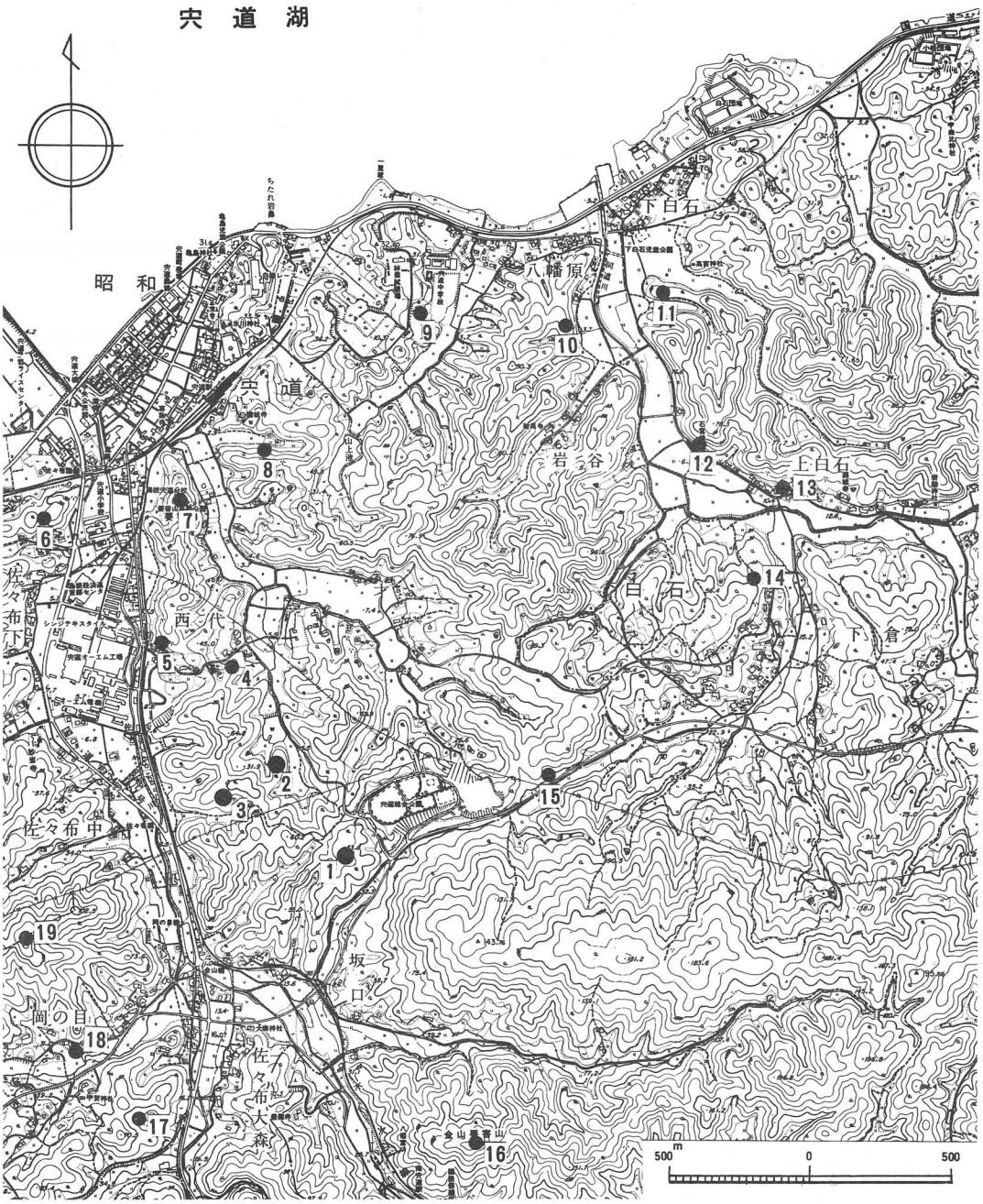


図 2.　水溜古墳群および周辺の遺跡

1.水溜古墳群　2.清水谷遺跡　3.矢頭遺跡　4.才横穴群　5.ＯＭ横穴
6.観音寺横穴　7.宍道要害山　8.随音寺横穴群　9.伝塩冶判官の墓　10.荻古墳
11.伊賀見古墳群　12.犬石、猪石　13.下の空古墳　14.椎山１号墳　15.女ケ峠横穴
16.金山要害山　17.大森経塚　18.岡の目遺跡　19.佐々布要害山

Ⅲ　調　査　の　概　要

1.　水溜古墳群について

水溜古墳群は昭和５９年３月に実施した分布調査により発見された古墳群で、現在のところ３０基から構成されている。「水溜」の名称は旧小字によって名付けたものであるが、地元の人の話では水溜５号墳の北側にくぼ地があり、雨などが降ると水が溜まるので、水溜の名が付いたという。

古墳群は約１４haの範囲に分布するが、隣接する現島根中央家畜市場ではその造成の際３基の墳墓からなる清水谷遺跡、弥生～古墳時代の住居趾、横穴墓からなる矢頭遺跡が発見されている。また古墳群を北向きに才川の形成する谷平野を下ると、谷の中間にⅢ群１６穴からなる才横穴群が、谷の入口付近には随音寺横穴群[注5]に代表されるような岩に掘り込んだ横穴墓が数例確認されている。

水溜古墳は、下図のような分布を示し、１３個の円墳、１６個の方墳、１個の前方後円墳からなり、群中最大規模をもつ５号墳を中心に分布している。５号墳の他は１辺や直径が１０ｍ前後の小規模な古墳が多い。分布状況をみると、地形に制約されているため、尾根上に並ぶように築造されている。水溜５号墳、清水谷、矢頭遺跡の発掘例をみてみると、弥生時代から古墳時代後期にかけての墳墓が確認されており、それらが連綿と造り続けられた可能性がある。

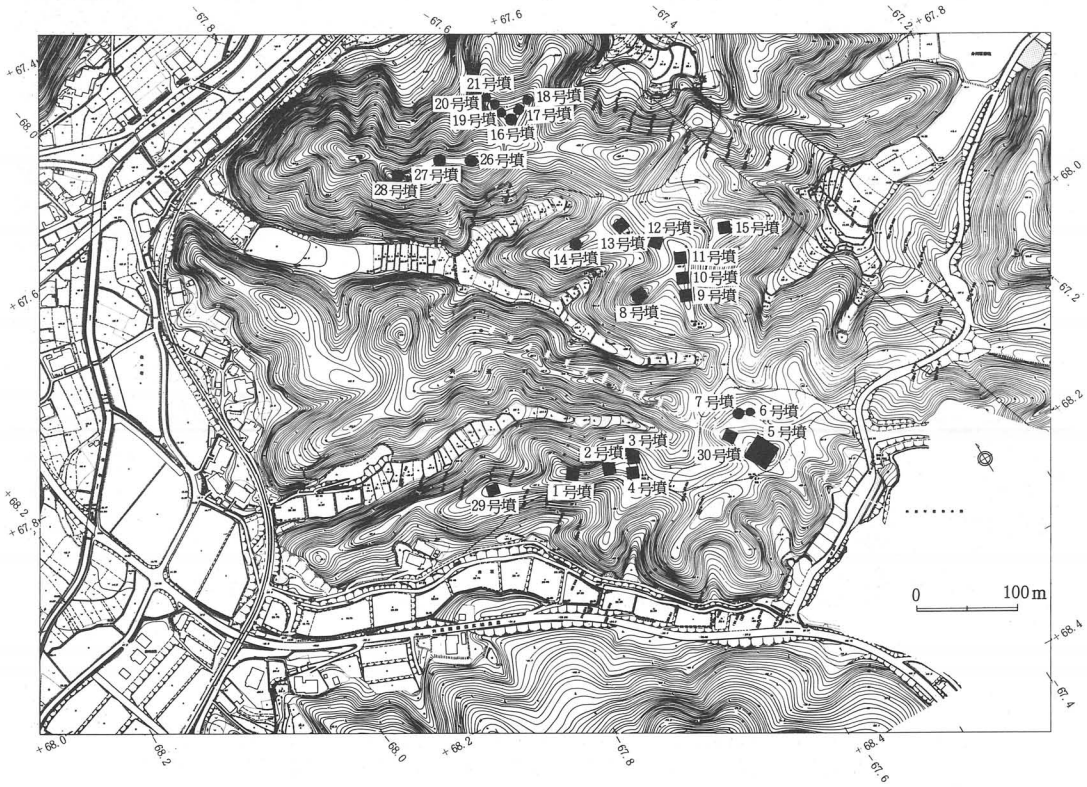


図 3.　水溜古墳群配置図

水溜古墳一覧表

名称	墳形	規模(m)	備考	名称	墳形	規模(m)	備考
1号墳	方墳	10.5×7.5 高0.4～0.7	切削溝	16号墳	円墳？	12.8×11.3 高0.6	切削溝
2号墳	方墳？	8.5×8.5 高0.4～0.7		17号墳	円墳	9.8×9.2 高0.3～0.8	切削溝
3号墳	方墳？	9.5×6.5 高0.4～0.9		18号墳	〃	径6.6 高0.1～0.4	
4号墳	円墳？	7.5×7.5 高0.4～0.6		19号墳	〃	7.3×9.0 高0.1～0.9	切削溝
5号墳	方墳	25×25 高3.5	埴輪出土	20号墳	〃	6.1×5.9 高0.3～0.8	〃
6号墳	円墳	8.0×7.0 高0.7～0.9	周溝	21号墳	〃	5.2×6.5 高1.2	急斜面に立地 切削溝
7号墳	円墳？	径約8.0 高約0.5		22号墳	前方後円墳	全長24.5 後円高1.5 前方高0.5	切削溝
8号墳	方墳	12.7×11.0 高〃1.3		23号墳	方墳	6.6×6.4 高0.2～0.7	
9号墳	〃	10.6×7.5 高0.5～0.8	切削溝	24号墳	〃	8.6×5.8 高0.6	
10号墳	〃	7.3×7.0 高0.4～0.3	〃	25号墳	〃	一辺約6.0 高約0.6	
11号墳	〃	11.3×9.2 高0.5～1.0	〃	26号墳	円墳	11.4×11.7 高0.7～1.0	南西に前方部状のテラス
12号墳	〃	8.5×9.5 高0.6～0.8	〃	27号墳	〃	10.5×8.2 高1.0×0.6	
13号墳	〃	12.0×11.0 高0.4～1.2	〃	28号墳	〃	8.5×5.8 高0.3～1.2	
14号墳	円墳	11.5×11.4 高1.0～1.2	南側に前方部状のテラス	29号墳	方墳	9.0×8.0 高0.4～0.8	
15号墳	方墳	11.6×12.0 高0.6	切削溝、テラス	30号墳	〃	14×12 高2	

2. 水溜5号墳、30号墳の概要

調査前、不明確ながらも、水溜5号墳は全長63mの前方後方墳の可能性を秘めるとの判断の下、準備を進めていった。その根拠として墳丘実測図、実物を見てみると、不整形ながらも、前方後方形になっていたからである。しかし、細部をみてみると、前方部側と後方部側の比高差があり過ぎるなど疑問の点も多く、確かなことは発掘調査を待たねばならなかった。

調査はAトレンチより進めていったのだが調査を進めるうちに後方部と考えた墳丘より埴輪片が多量に出土し始めた。この状況をみると、後方部の裾部は、前方部の墳頂より高い位置にあることが確認された。またDトレンチを調査すると、前方部とのくびれ部付近（杭E－6とE－5の間あたり）より墳丘を区切るような溝が確認された。そして後方部側を調査するにつれ、前方部と主軸がずれていることが確認された。これらのことから水溜5号墳は2つの方墳からなる連なった古墳の可能性が強いと判断した。そこで、調査の終了後、後方部と考えていた大きい方墳を5号墳、前方部と考えていた小さい方墳を30号墳とした。

3. 調 査 の 方 法

水溜５号墳、３０号墳上に１０ｍ間隔の杭を委託設置し、それを基準に墳丘測量を行った。杭はほぼ南北にＡ－Ｇの７列、東西に１～１１の１１列による方眼をつくり、各杭にＡ－２、Ｂ－４などの名称をつけたもので、今回の調査の基準は全てこれらの杭によった。座標軸をみると、Ｅ－８はＸ＝－67,534ｍ、Ｙ＝＋68,097ｍ、標高69.8ｍ、Ｅ－１はＸ＝－67,586ｍ、Ｙ＝＋68,046ｍ標高65.3ｍである。

トレンチの設定もこの杭によった。ＡトレンチはＥ軸に沿ってＥ－９を中心に23.5ｍ、Ｂトレンチは８軸に沿ってＤ－８を中心に１６ｍ、Ｃトレンチは８軸に沿ってＦ－８を中心に11.5ｍ、ＤトレンチはＥ軸に沿ってＥ－６を中心に２２ｍ、ＥトレンチはＥ軸に沿って１２ｍ、Ｆトレンチは４軸に沿って１０ｍ、Ｇトレンチは４軸に沿ってＦ－４を中心に１０ｍ、Ｉトレンチは５軸に沿って5.5ｍ、Ｊトレンチは６軸に沿って８ｍ、ＫトレンチはＤ軸、Ｅ軸の間８ｍ、Ｌトレンチは７軸に沿ってＦ－７を中心に１０ｍ、Ｍトレンチは７軸に沿ってＤ－７を中心に１０ｍ、ＮトレンチはＥ軸とＦ軸の間９ｍである。

調査は、古墳の墳形、規模、築造時期を目的とするものであるので、墳端を明確にできるように設定した。ＡトレンチからＢ・Ｃ・Ｄ・・・と進めていくもので、遺物の出土状況と土層の実測が主な調査内容となった。

この古墳の発見時は、５号墳と３０号墳が１つの前方後方墳と考えていたため、調査終了時から考えるとやや傾いた軸の設定になっていたようである。

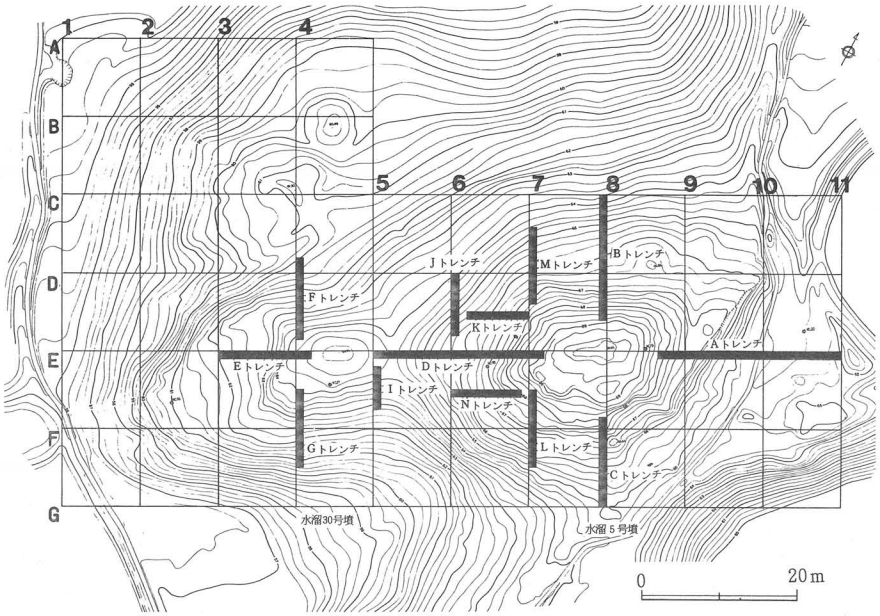


図４. 水溜５号墳、３０号墳トレンチ配置図

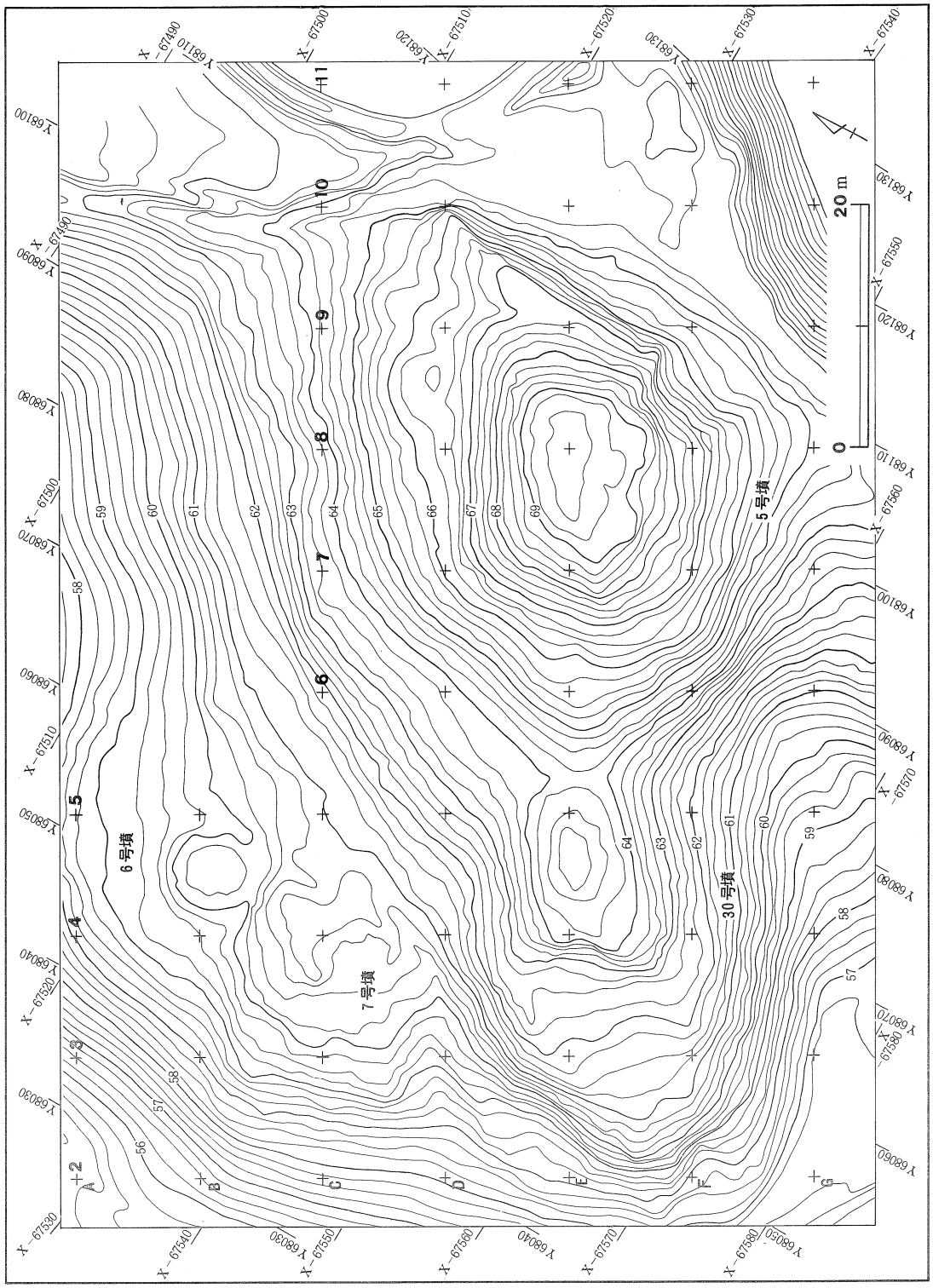


図 5.　水溜 5 号墳、３０号墳墳丘実測図（１／５００）

(1) Ａトレンチ

Ａトレンチは５号墳東端、Ｅ軸に沿った幅１ｍ、長さ23.5ｍである。Ｅ－９より東へ1.5ｍのところから大きく削平され、約2.5ｍ下った地点で広い平担面を形成している。この削平部分は後世のものと考えられ、地山からの堆積は薄く、遺物は全く出土していない。Ｅ－９より西へ3.5ｍと東へ1.5ｍは比較的古墳築造時の姿を示していると考えられる。Ｅ－９より西へ2.0ｍ～2.5ｍのところに幅５０㎝の平担面がみられるが、これは５号墳の他のトレンチでも観察されたように、二段築成の段と考えられ、Ａトレンチの部分では地山を加工して墳丘面を形成したことが窮える。Ｅ－９より東、削平部までの間は平担面であるが、幅約0.7ｍ、深さ0.2ｍの溝がみられる。土層を観察すると、墳丘加工面上に堆積した土層を掘り込んでおり、これも後世の溝、あるいは道として利用されたものと推定される。墳端は、この溝のためにはっきりしないが、Ｅ－９の付近であろう。

遺物として埴輪片が約５０片出土しており、いずれも５㎝前後の小さなものである。Ｅ－９を中心とする幅1.6ｍに分布するが、特に溝の中から多く出土している。土層の関係からみると、黄褐色土層、灰茶色土層からの出土が多い。

出土した埴輪は、いずれも破片であり、全容を知り得ないが、すべて土師質で黒斑を有さない。外面には２次調整をおこない、施し方は明確ではないがＢ種あるいはＣ種横ハケと考えられる。[注6] 図６－５は底部調整をもつが、内面に指をあて、外面には、板状の工具をあてて押圧した痕跡が観察できる。

(2) Ｂトレンチ

Ｂトレンチは５号墳の北端、８軸に沿った幅１ｍ、長さ１６ｍである。調査全体を通して判明したことであるが、５号墳北側斜面はきれいな等高線を示すものの、現在見られる裾部は古墳本来の裾部よりやや内側に入っている。このことは、５号墳北側斜面は自然の崩落があったか、後世の削

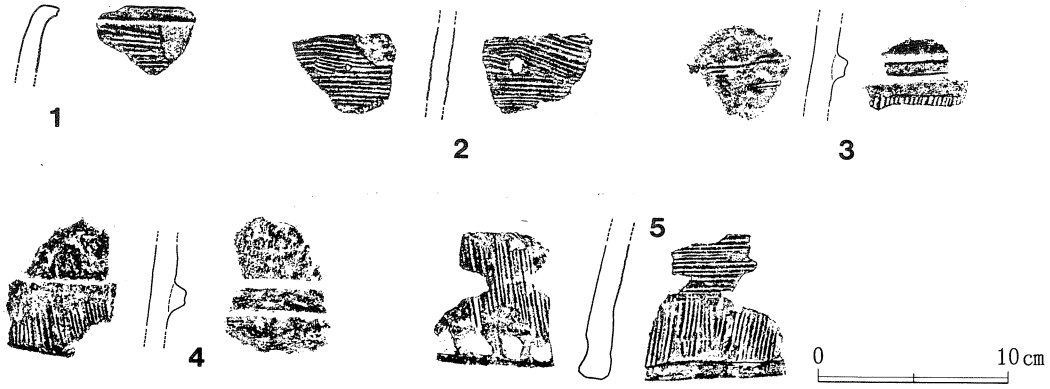


図6.　Ａトレンチ出土遺物実測図

図 7.　A トレンチ土層図及び遺物出土状況図

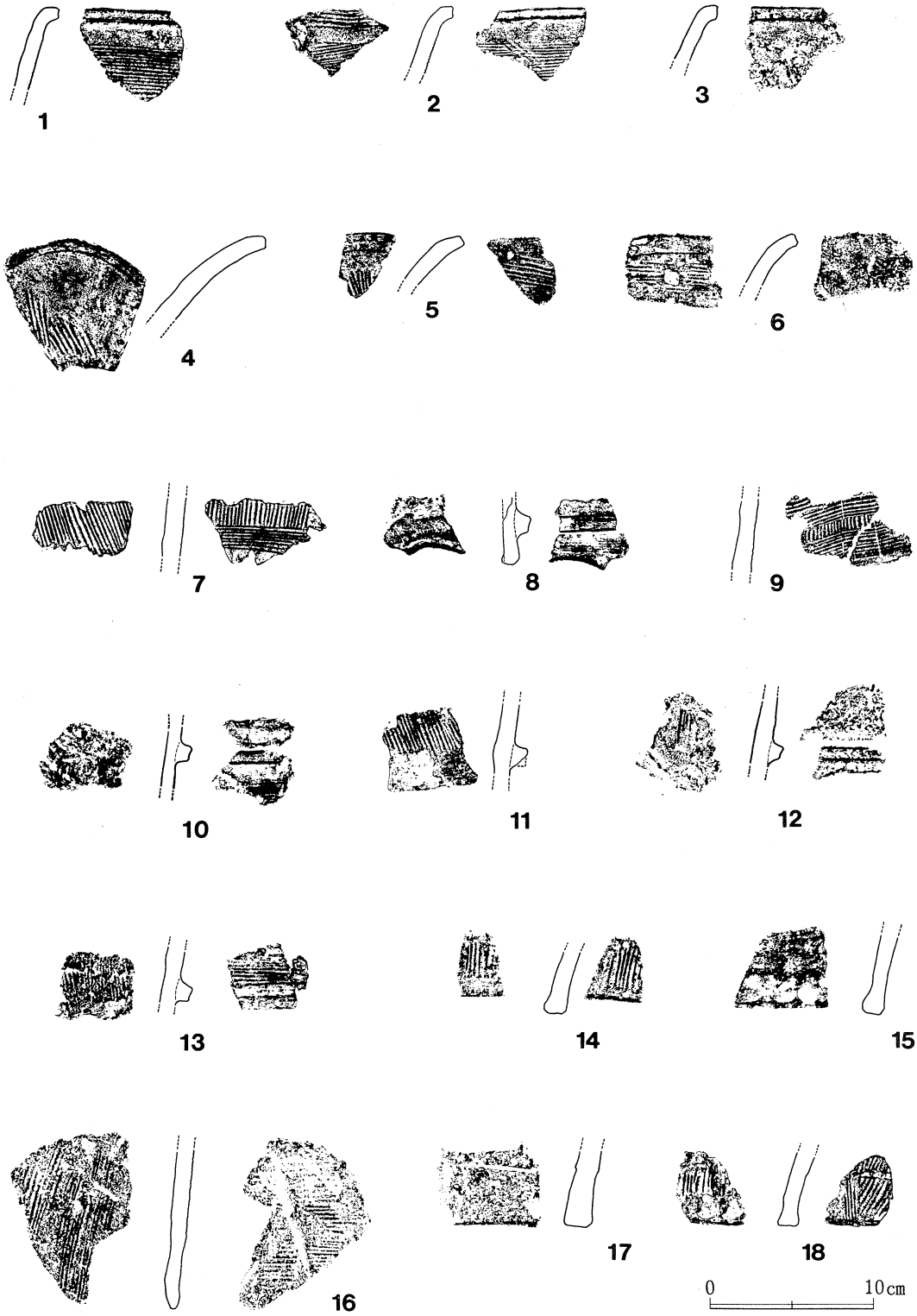


図 8.　B トレンチ出土遺物実測図

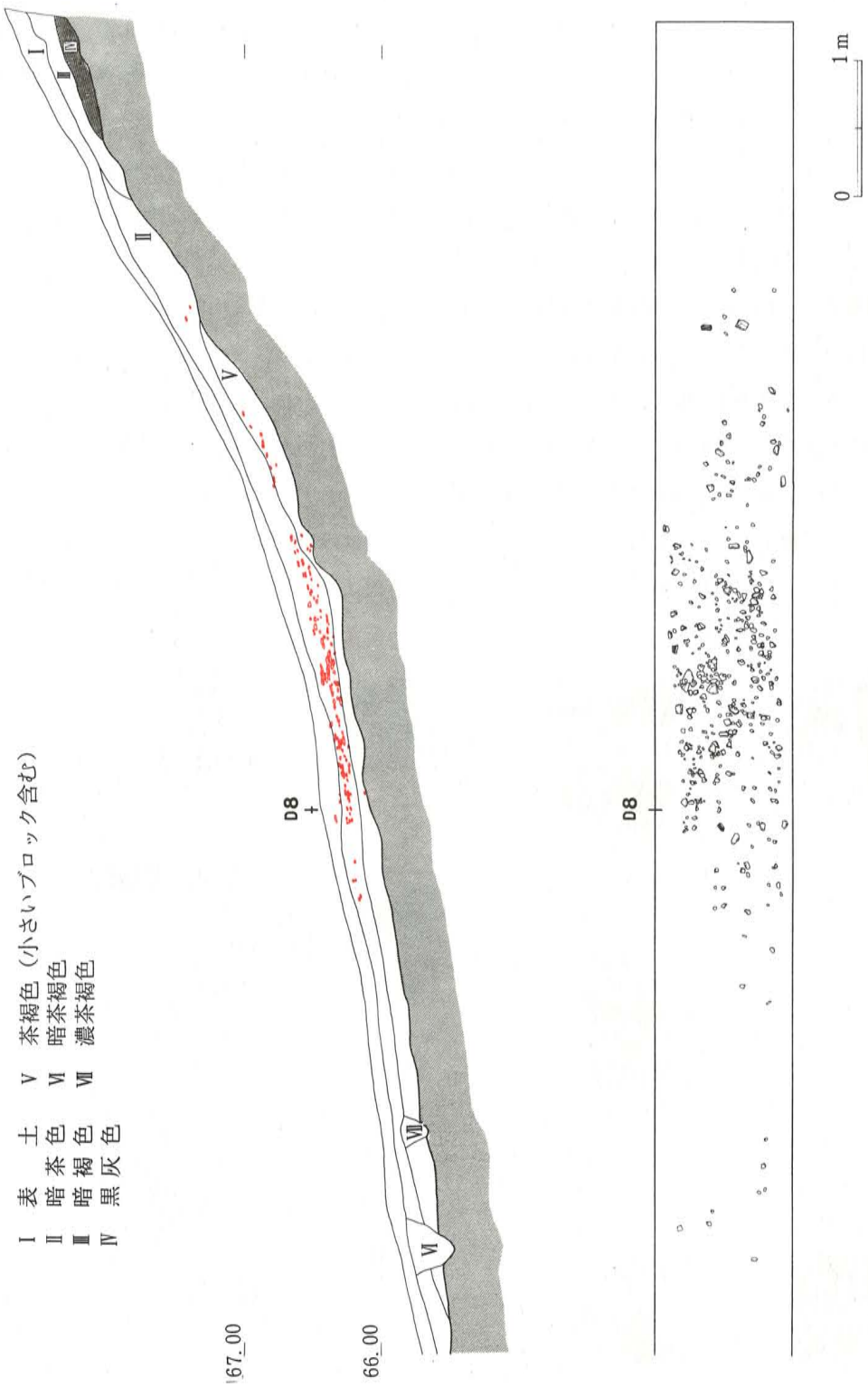


図 9.　Ｂトレンチ土層図及び遺物出土状況図

平を受けたと考えられるが、地形からみると、人工的な削平を受けたような気がする。また、埴輪の出土状況をみると、他のトレンチに比べ、細かい破片が広範囲に、しかも浅い地点から出土しており、後世、何らかの手が加ったと考えたほうが妥当であろう。

土層を観察すると、D－8から南へ1.6ｍの地点が地山を加工した墳裾と考えられ、あまり明瞭ではないがD－8より南へ3.9ｍの地点あたりが二段築成の段と考えられる。標高は墳裾が66.3ｍ段築部が約67.3ｍあたりといえよう。また段築部付近より頂部にかけては旧表土の上に暗褐色の盛土が観察されるが、段築部より裾部にかけてはD－8より北4.1ｍまで旧表土が確認できないので、古墳上段部は盛土により、下段部は地山を削り出したものであろう。

ここでも出土遺物は埴輪のみである。平面的な分布をみると、D－8の地点からD－8より南へ2.5ｍの地点に多く分布するが、その破片は他のトレンチのものと比べると細かいものが多い。土層的にみると、暗茶色土層に特に多く含まれる。

出土した埴輪はすべて土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪が主であろうが、図8－4、5でみられるように朝顔形埴輪も若干含まれている。外面には2次調整を施すが、図8－9の場合、

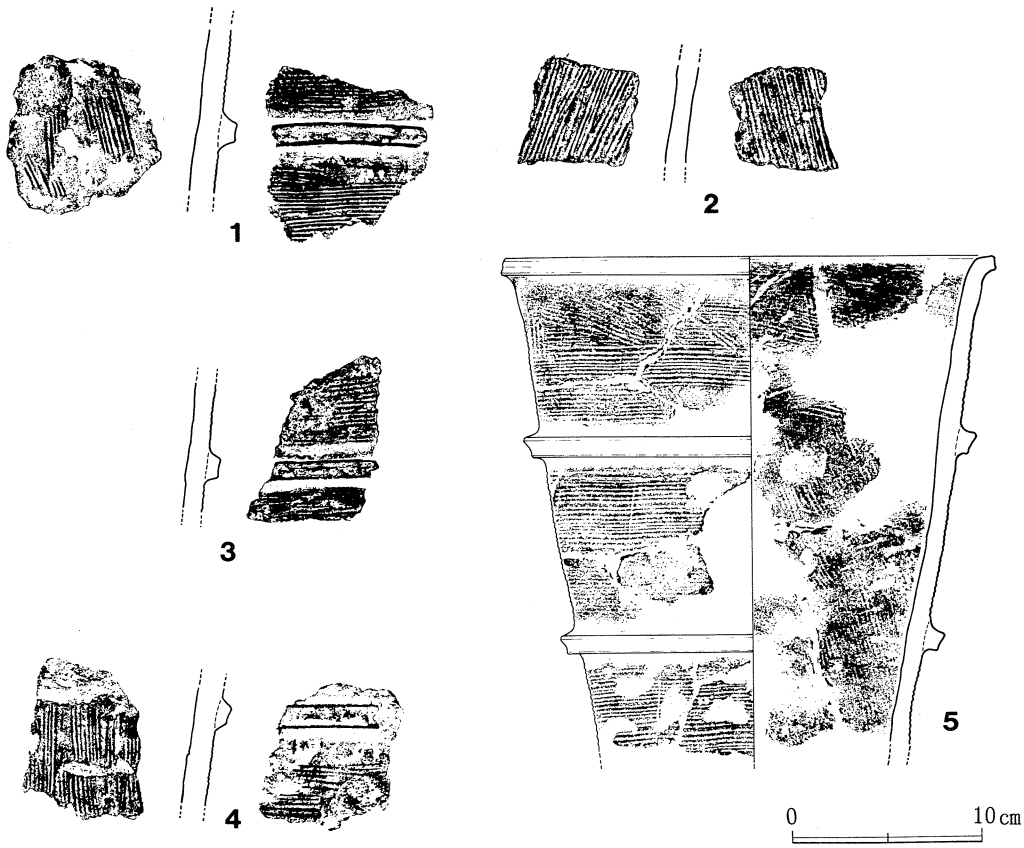


図10.　Cトレンチ出土遺物実測図

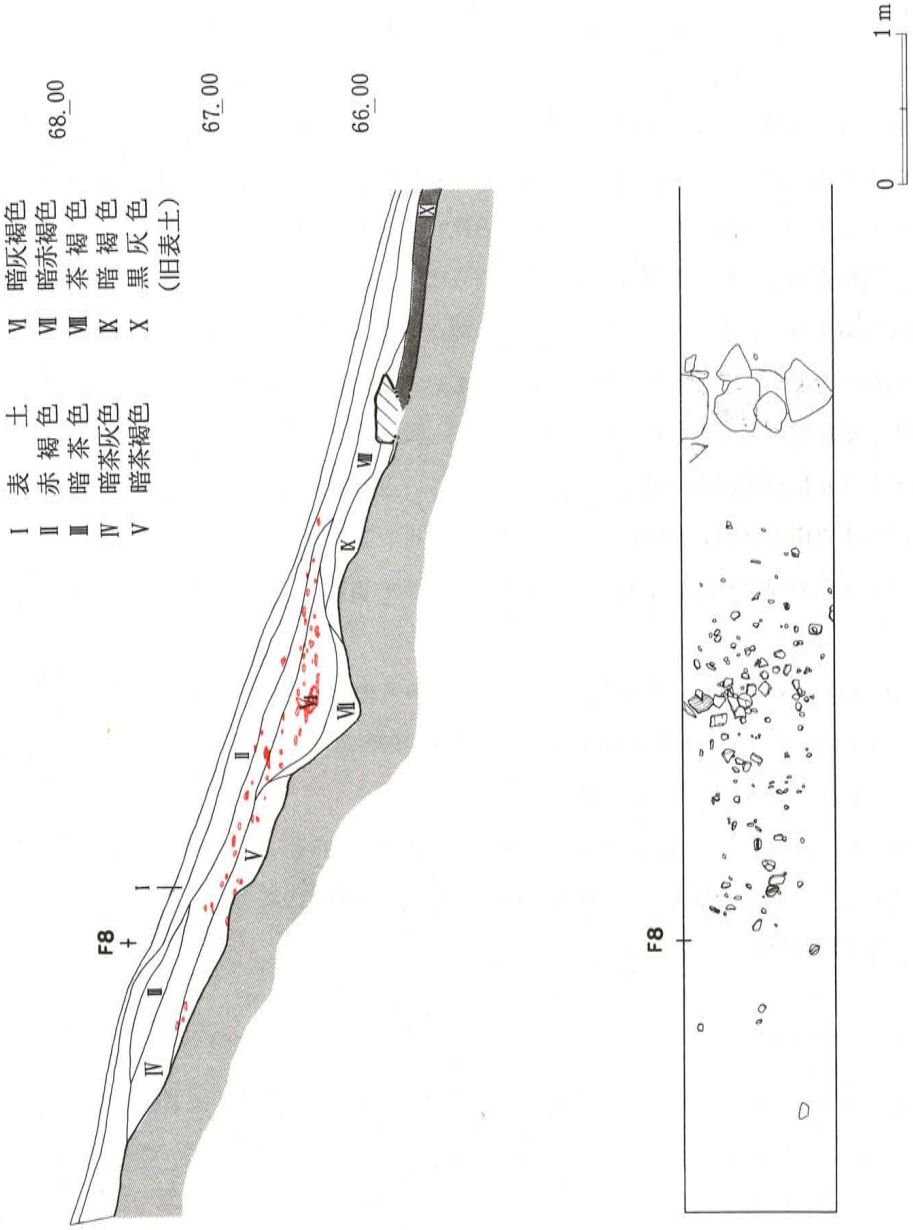


図11. Ｃトレンチ土層図及び遺物出土状況図

明らかにＢ種横ハケを施している。基底部は５片確認されたが、図６－１４、１５、１７、１８については底部調整らしきものが確認できるが、１６についてはそれが認められない。

(3) Ｃトレンチ

Ｃトレンチは５号墳の南端、８軸に沿ってＦ－８を中心とする幅１ｍ、長さ11.5ｍである。地形測量図を見てみるとＣトレンチ東側に大きく削平された部分があったりして、遺構の保存状態はあまり良くないと想定していたが、調査してみると比較的旧地形を良く残しており、出土した埴輪片も大型で、原位置からそれほど移動していないようにみうけられた。

土層図を観察すると、Ｆ－８より南へ1.5ｍの地点で地山がやや深く掘り込まれており、さらに南へ平担面がやや続く。原形をよく留めた埴輪片もＦ－８の南1.5ｍ地点から多く出土しており、ここの地点が墳裾であろう。標高は約66.2ｍである。段築部はこのトレンチでは確認されていない。

Ｆ８の南3.5ｍに石列がみられるが、土層図をみると古墳築造に伴って設置されたと考えた方がよいが、石列より南では旧表土が観察され、地山の削平がなかったようである。石列の性格は不明で、ボーリング棒で周辺を探ってみたが、長く続くものでなく、Ｃトレンチを中心に約２ｍ伸びる程度である。

出土遺物は埴輪のみである。平面分布をみると、Ｆ－８地点から、南へ2.5ｍの範囲に多く分布しており、土層的にみると、原形を留めた比較的大きい破片は暗灰褐色土層に多く、比較的小さい角の丸まった破片は上層の暗茶灰色土層から出土している。

埴輪はいずれも土師質で黒斑を有さない。外面調整は縦ハケの後、２次調整の横ハケを施す。この横ハケは図１０－５でＢ種横ハケが確認されているが、他のものについては不明である。このトレンチから基底部は発見されていない。

(4) Ｄトレンチ

Ｄトレンチは５号墳と３０号墳をつなぎ、Ｅ軸に沿ってＥ－６を中心とする幅１ｍ、長さ２２ｍである。調査前は、５号墳、３０号墳を一つの前方後方墳とする考え方も強く、今回の調査のポイントとなるトレンチであった。

土層図を観察すると、Ｅ－７より西へ約4.2ｍの地点に地山加工の変換点があり、この付近から埴輪の出土が多いことからも、５号墳西端の墳裾と考えられる。墳裾の標高は約66.3ｍである。一方、Ｆ－７より西へ2.5ｍの地点と、同じく西へ1.5ｍの地点に幅約８０㎝の平担面がみられ、いずれかが、二段築成時の段築部分であろうが、Ｂトレンチの例からみるとレベル的には上段の平担部がそれに近い。標高67.3ｍである。また５号墳の西側（Ｄトレンチ側）も北側（Ｂトレンチ側）と同様

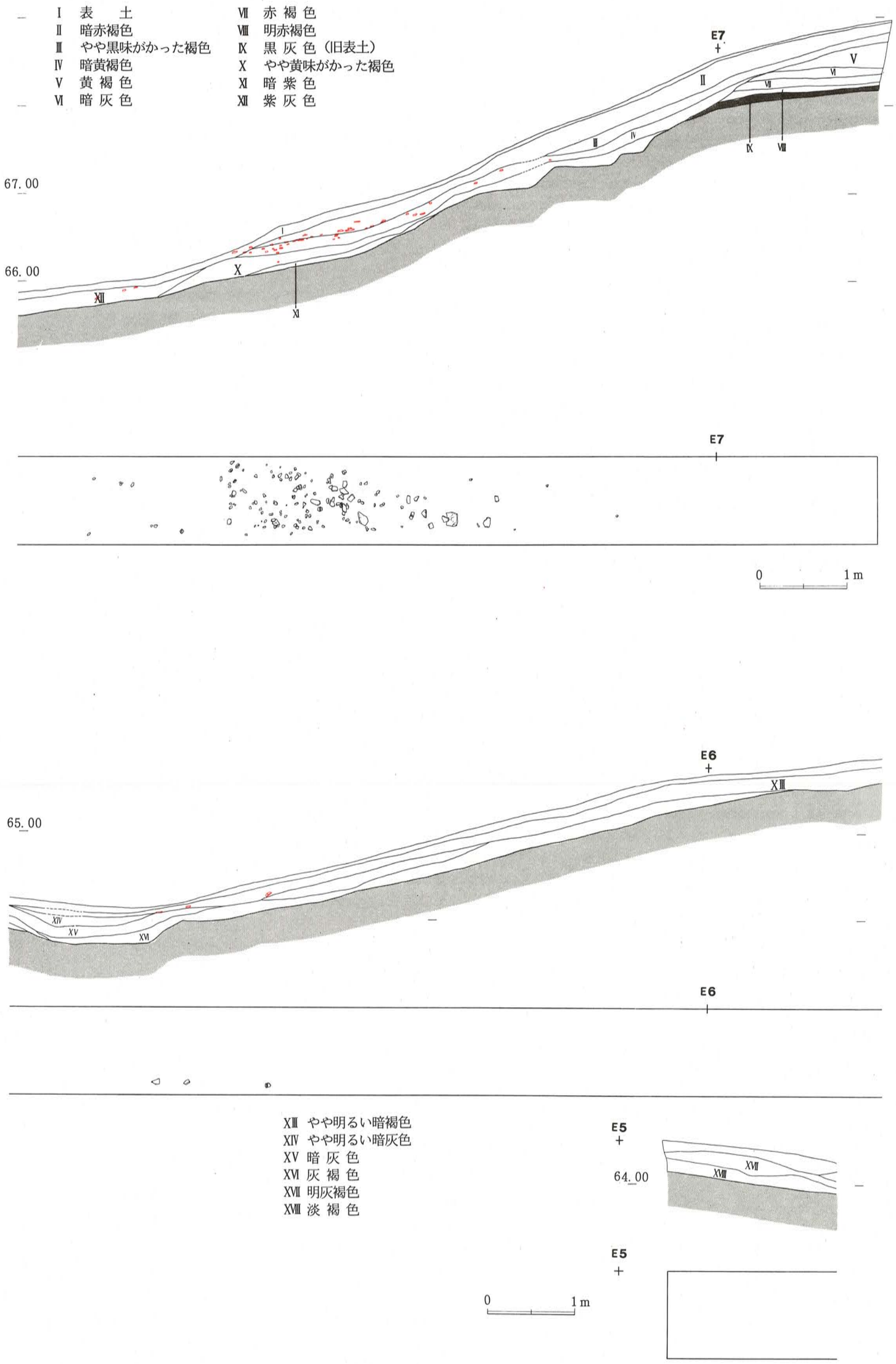


図12. Dトレンチ土層図及び遺物出土状況図

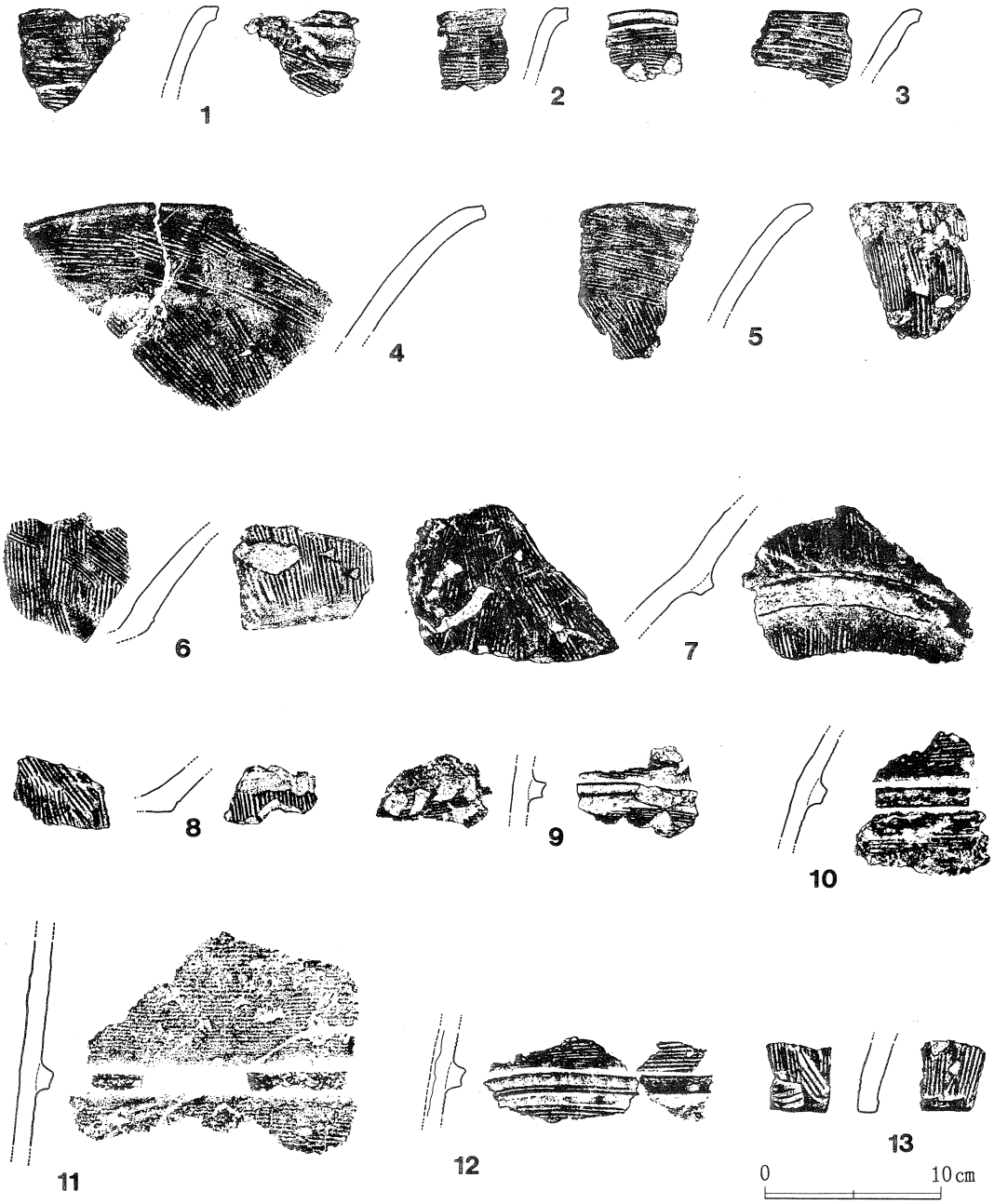


図13. Ｄトレンチ出土遺物実測図

に、段築部分より頂部にかけては盛土による成形であり、段築部分より下方は地山を加工して墳形を整えたことが確認できる。

ところで調査のポイントとなった「２つの古墳か１つの古墳か」の問題であるが、Ｅ－５より東約３ｍの地点に幅 2.5 ｍ、深さ約 0.5 ｍの溝が検出された。この溝は、土層図より見ると、３０号墳築

造時に掘り込まれたようである。

出土遺物は埴輪が検出され、Ｅ－７より西３ｍの地点から同じく西６ｍの地点に多く、５号墳の墳裾周辺から多く分布している。３０号墳側からは、前述の溝から破片が少々出土しているが、いずれも５号墳側からの流れ込みと考えられ、３０号墳には埴輪を使用していないようである。土層的にみてみると、特に暗茶褐色土層に多く含まれ、わずかに、その上層、下層にも含まれている。

埴輪はいずれも土師質で黒斑を有さない。器形をみると、円筒埴輪と朝顔埴輪があるようである。胴部の外面調整はいずれも二次調整を行っており、明瞭ではないが、Ｂ種の横ハケであろうか。図Ｂ－１３は基底部であるが、外面には底部の５㎜上まで縦ハケを施す。内面にもはっきりした加工痕を残すが、手法は判らない。

(5) Ｅ トレンチ

Ｅトレンチは３０号墳の西端で、幅１ｍ、長さ１２ｍのトレンチである。Ｅ－４の地点から西に向かい急斜面になり、Ｅ－４より２ｍ地点まで下っていくが、その差約1.5ｍである。調査前は、Ｅ－４の付近が３０号墳の端部の上場で、下った地点が下場と考えていたが、ここも後世の加工を受けたようである。

土層図をみると、墳丘上では、地山と表土の間に一層ほどあり、盛土ではないかとも考えられる。いずれにしろ、このトレンチ部分は大きく削平されているようで古墳の裾部などはっきりしていない。

遺物は確認されていない。

(6) Ｆ トレンチ

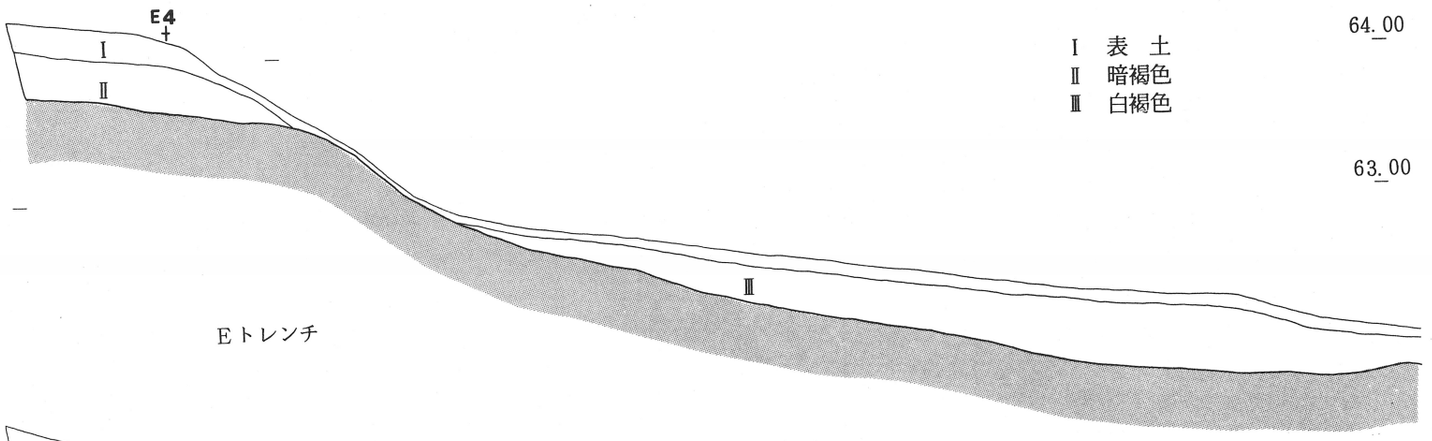
Ｆトレンチは３０号墳の北側で、４軸に沿った１０ｍである。このトレンチは、前方部の開き具合を調べるために設定したものであって、３０号墳の調査のためにはやや不適切であったようにおもえる。

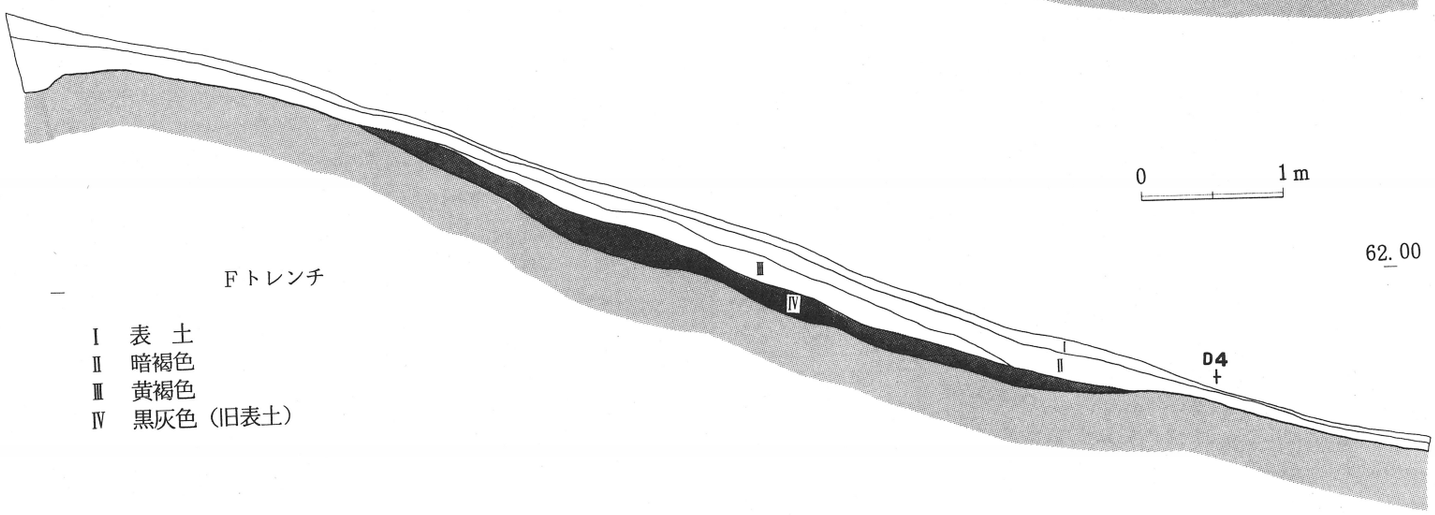
土層図を観察するとＥ－４より４ｍ北の地点から旧表土がみられることから、墳頂部は地山を削り込んだものと考えられるが、この土層をみる限り、古墳の盛土状況や墳端については確認できないようである。

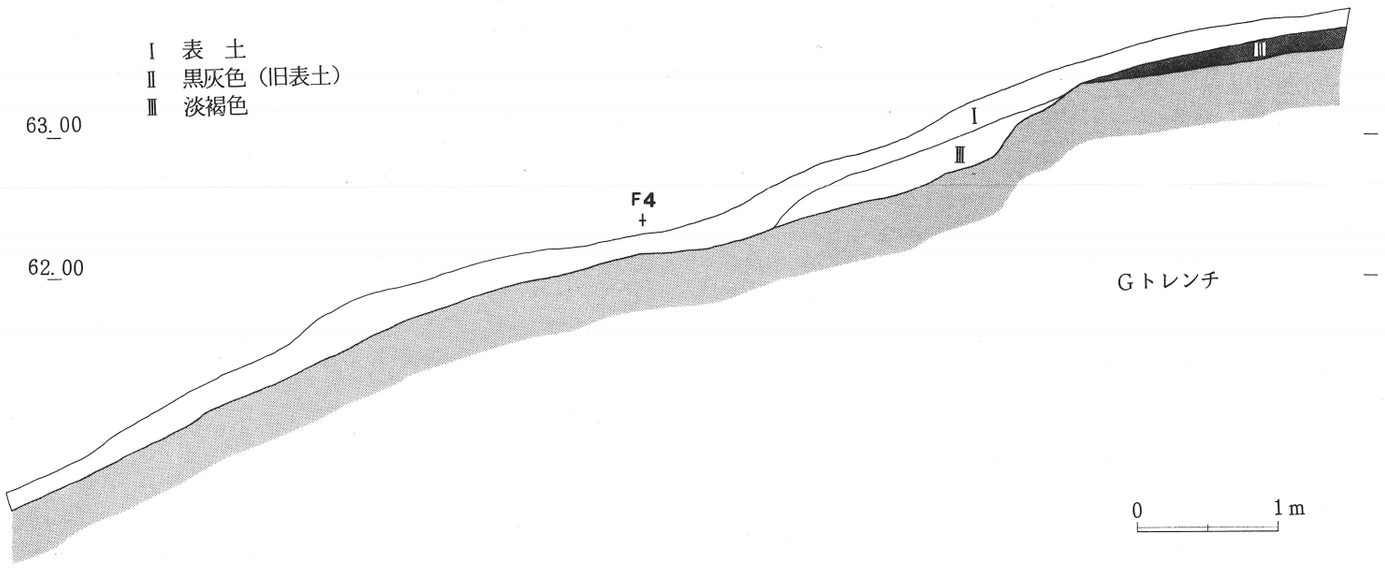
遺物は確認されていない。

(7) Ｇ トレンチ

Ｇトレンチは３０号墳の南側で４軸に沿った幅１ｍ、長さ１０ｍである。このトレンチの付近には測量図にも明らかなように、Ｆ－４からＦ－５の地点にかけてやや平担面がある。この平担面を南に過ぎると大きく傾斜して約５～６ｍ下る。







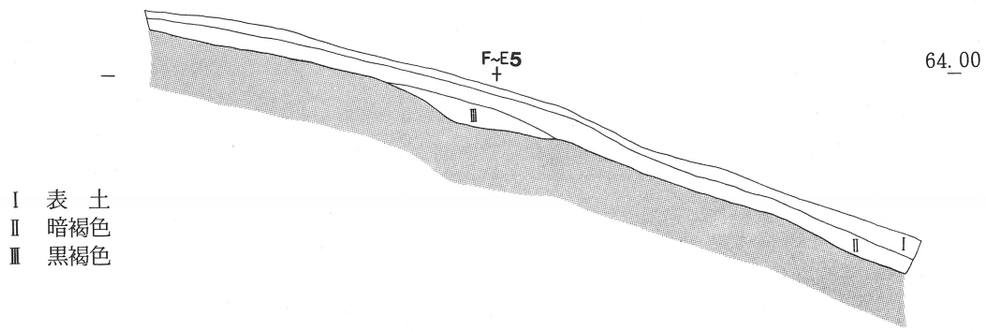


図14. E、F、G、Iトレンチ土層図

土層図をみると、Ｆ－４より2.5ｍ北の地点に裾部らしい深い地山加工がみられる。一方、この裾部からやや墳頂部にのぼった地点では旧表土が観察できる。このことから、３０号墳の南側斜面の場合、墳裾の部分は地山を加工して整え、墳頂の部分では地表面がそのまま利用されたか、盛土を施したことが推定されるが、今回調査した部分まででは、いずれの方法によったかは判断できないようである。

遺物は全く出土していない。

(8) Ｉトレンチ

Ｉトレンチは３０号墳の南側、５軸に沿った幅１ｍ、長さ5.5ｍである。このトレンチもＦトレンチ、Ｇトレンチと同様に前方後方墳を意識したものであったため、３０号墳のための調査としてはやや不適切なトレンチ設定であったようにおもわれる。

土層図を観察すると複雑な堆積は示しておらず、古墳の端部であるためもあろうが明瞭な墳丘形成のための加工痕はみられない。ただ、Ｆ－５より南へ4.5ｍの地点を中心に、やや地山を掘り込んだとおもえる部分があるが、これが墳端にあたるものか、あるいは、Ｄトレンチで検出された溝に続くものであるのか、はっきりしない。

遺物は出土していない。

(9) Ｊトレンチ

Ｊトレンチは、５号墳と３０号墳との間に設定したもので、６軸に沿って幅１ｍ、長さ６ｍである。このトレンチは、古墳周辺の状況を探るためと、調査に先だち、Ｄ－６の付近で埴輪片が数片表採されていたため、何らかの墳構があるかもしれないということで設定したものである。地形はなだらかな傾斜面である。

土層図を観察すると、Ｆ－６より北へ４ｍの地点から、同じく北へ９ｍの地点までの、トレンチほぼ全域で明瞭に旧表土がみられ、地山を加工した痕跡はない。ＤトレンチのＥ－６付近では旧表土は観察されていないことから推察すると、Ｄトレンチ側は地山を削り、Ｊトレンチ側はやや低かったので、土を盛ったものと考えられる。

遺物として埴輪片がトレンチのほぼ全域から約２０片ばかり出土しており、特に集中する地点は

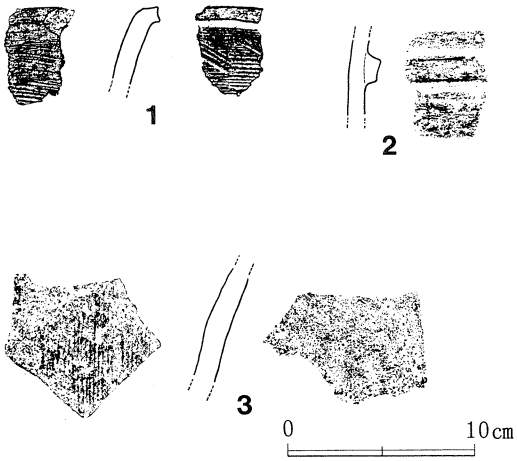


図15. Ｊトレンチ出土遺物実測図

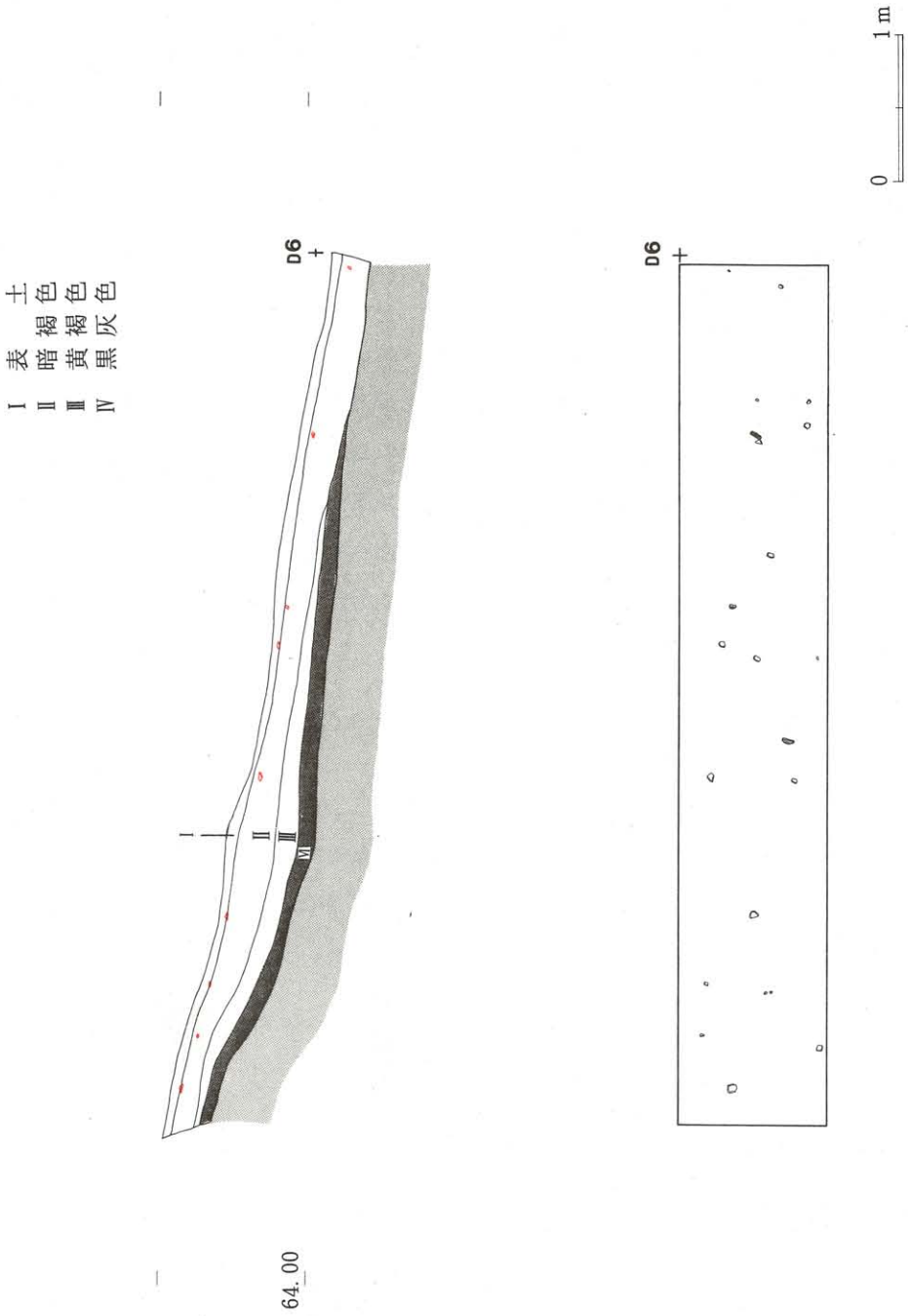


図16. Ｊトレンチ土層図及び遺物出土状況図

ない。土層の関係からみると、いずれも表土あるいは、暗褐色土中より出土しており、古墳築造後の流れ込みによると考えたがよい。

埴輪は流れ込みによるためであろうが、小さな破片が多く、詳細はわからないが、いずれも土師質で黒斑は有さない。外面調整を観察できるものをとりあげてみると、胴部には二次調整の横ハケを施しているが手法は不明である。

(10) Ｋトレンチ

Ｋトレンチは５号墳の西側、Ｄ軸とＥ軸の中間に平行しており、幅１ｍ、長さ8.5ｍである。このトレンチは５号墳が１つの方墳であろうと確認してから設定したもので、古墳の墳形、墳裾部の位置をより明確にしようとするものであった。調査の結果からであるが、ＫトレンチやＮトレンチを設定した西側斜面は他の斜面に比べて比較的古墳築造時の地形を残しているようである。

土層図を観察するとＤ－７とＥ－７の中間点から約2.5ｍ西の地点に地山を大きく削る変換点があるが、他のトレンチの状況や、埴輪の出土状況より、墳裾部であろうと考えられる。標高は66.3ｍである。この墳裾からやや墳頂部に向かうと旧表土がみられ、その上に盛土らしき土層が確認できる。一方、墳裾から約４ｍ西にかけては地山を削って、古墳の周囲を整えているようである。

遺物は埴輪片が出土しており、墳裾部を中心に西へ流れるようにして約２ｍの範囲に分布してい

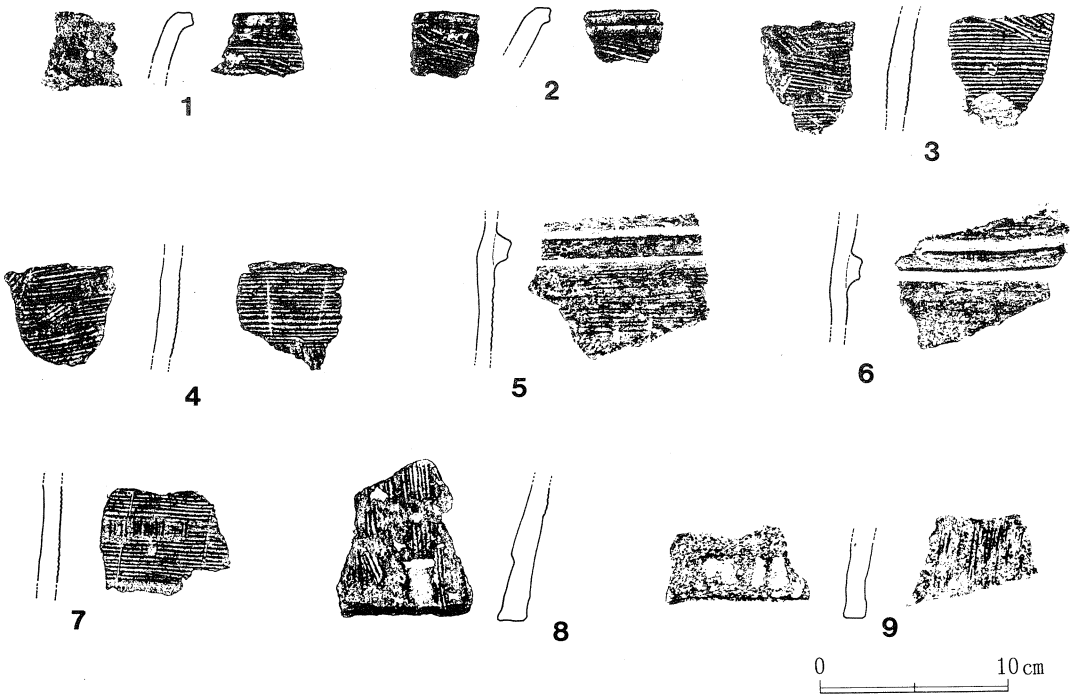


図17. Ｋトレンチ出土遺物実測図

図18. Kトレンチ土層図及び遺物出土状況図

る。土層的にみてみると、黒褐色土層、暗褐色土層に多く、表土にも含まれている。

埴輪は約７０片出土しているが、いずれも土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪の口縁が確認されている。胴部の外部調整はいずれも２次調整を施しており、図１７－４、７では明らかにＢ種横ハケが確認されている。基底部は２片ほど確認されているが、いずれも低部調整はなされていないようである。

(11) Ｌ トレンチ

Ｌトレンチは５号墳の南側、７軸に沿ってＦ－７を中心とする幅１ｍ、長さ１０ｍである。方墳の南の部分に設定したトレンチであるため、墳裾のほうは比較的良く残っていたが、墳頂部に近づくにつれ、墳丘面が流出していた。

土層図を観察すると、Ｆ－７から南へ0.５～１ｍあたりで地山を削って整えているが、このあたりが墳裾であろう。標高は66.２ｍあたりである。墳裾部分から２ｍ少々墳頂部に向かうともう一段地山を削った変換点があるが、これが二段築成の段築部であろうか。

遺物は埴輪片が出土しており、平面的にはＦ－７よりやや南を中心に幅２ｍの範囲に分布しており、その前後では全く確認されていない。土層的にみると、黒褐色の土層中にほとんどの破片が含まれている。

埴輪は約100片出土しており、いずれも土師質で黒斑を有さない。比較的大型のものも含まれており、５号墳の西側から南側にかけてはあまり後世の加工を受けていないようである。器形は円筒埴輪の口縁が確認されている。胴部の外面調整は縦ハケの１次調整の後、横ハケの２次調整をおこなっており、Ｂ種の横ハケがみられる。基底部も数片確認されているが、図１９－１２は底部調整は認められず、１１は、内面に指頭圧による調整痕を残す。

(12) Ｍ トレンチ

Ｍトレンチは５号墳の北側、７軸に沿ってＤ－７を中心とする幅１ｍ、長さ９ｍである。このトレンチは古墳のちょうど北側斜面と西側斜面のコーナーに位置し、また、Ｂトレンチでも述べたように、後世の削平を受けていると考えられる部分である。土層図を観察するとＤ－７あたりで地山の変換点があるので、この付近が墳裾であろう。

遺物は埴輪片が約６０片出土しているがいずれも土師質で、黒斑を有さない。器形は円筒埴輪の口縁が含まれており、外面調整として、胴部には縦ハケの１次調整の後、横ハケの２次調整を施している。横ハケについてはここでも確認できるものについては全てＢ種横ハケである。基底部も出土しているが、底部調整はないようである。

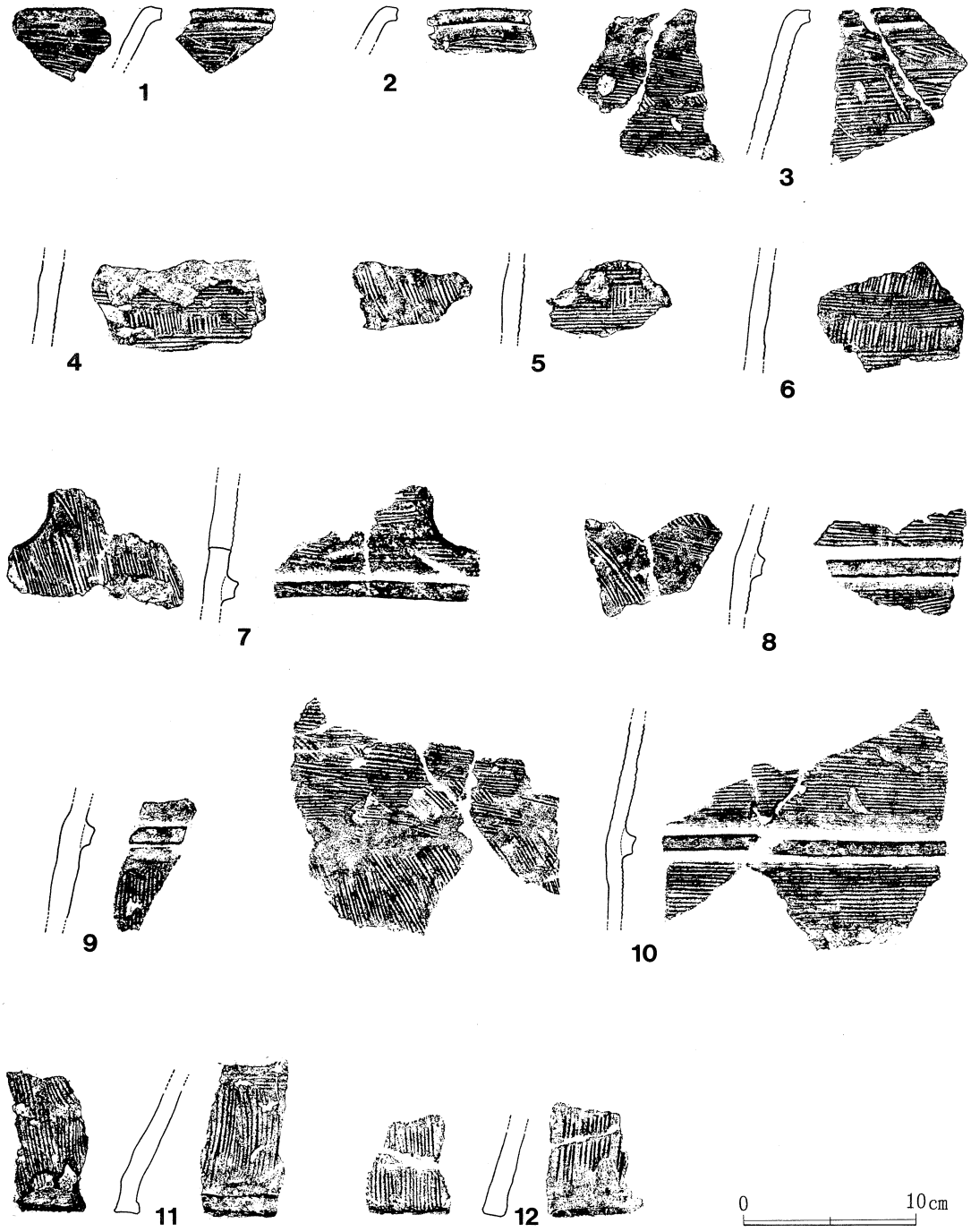


図19. Ｌトレンチ出土遺物実測図

図20.　Ｌトレンチ土層図及び遺物出土状況図

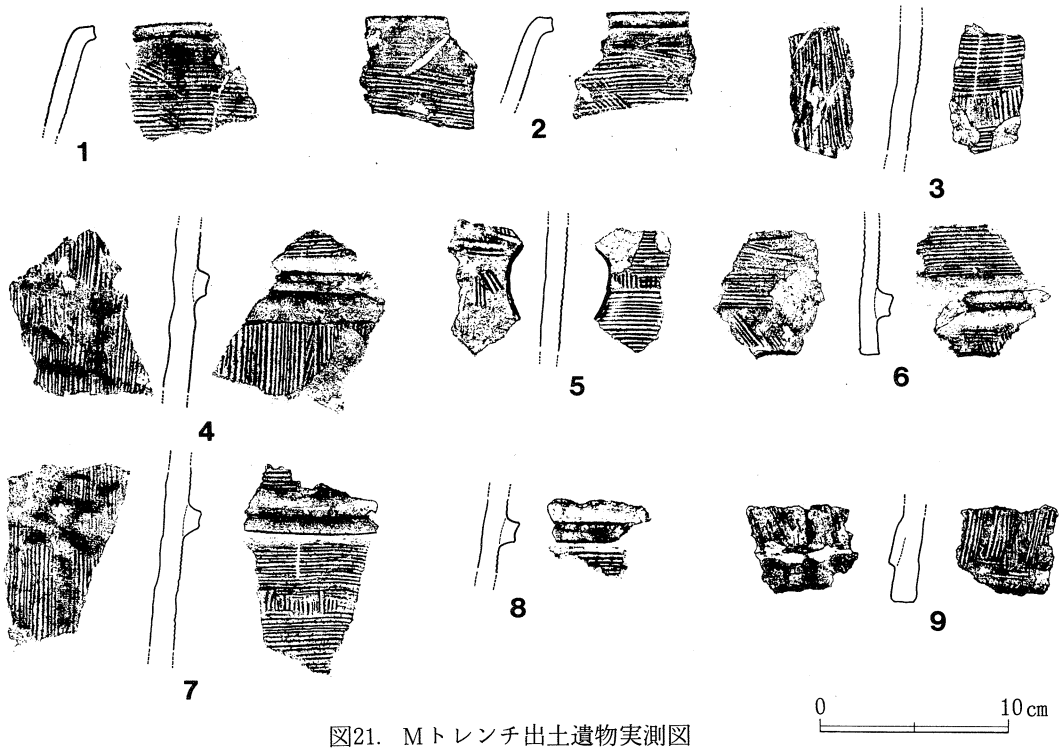


図21. Ｍトレンチ出土遺物実測図

(13) Ｎ ト レ ン チ

Ｎトレンチは５号墳の西側、Ｅ軸とＦ軸の中間を軸に平行に延びる幅１ｍ、長さ９ｍである。この場所は、古墳西斜面と南斜面の稜線にかかるように設定しており、頂部に向かうにつれて自然崩落の跡が著しかった。

土層図をみると、Ｅ－７とＦ－７の中間地点より5.5ｍ西の地点に地山を大きく削った部分がみられるが、レベル的にみてもここが墳裾と考えられる。この墳裾から2.5ｍほど頂部に向かうと、もう一段地山を削った部分があるが、段築部の跡を留めている可能性もある。墳裾より下方に向かっては明瞭な加工痕はなく、なだらかな地形となっている。

遺物は埴輪片が少量と高坏の脚部が１個出土している。いずれも墳裾とした部分に分布し、土層的には全て暗褐色土層中に含まれている。

埴輪は少量出土しているが、いずれも小さな破片で調整等を詳しく知り得ないが、観察できるものによると、ここでも２次調整の横ハケを施している。一方、高坏は脚部を残すのみであるが、ほぼ完全な脚である。底径１１cm、脚高６cmの土師器で、外面はケズリによる調整で、内面のソツ部は工具で回転ケズリを施し、広脚部はハケ調整を施している。この高坏に類似のものは、矢頭遺跡Ｂ区の住居趾中からも出土しており、両者の関連も考える必要がある。

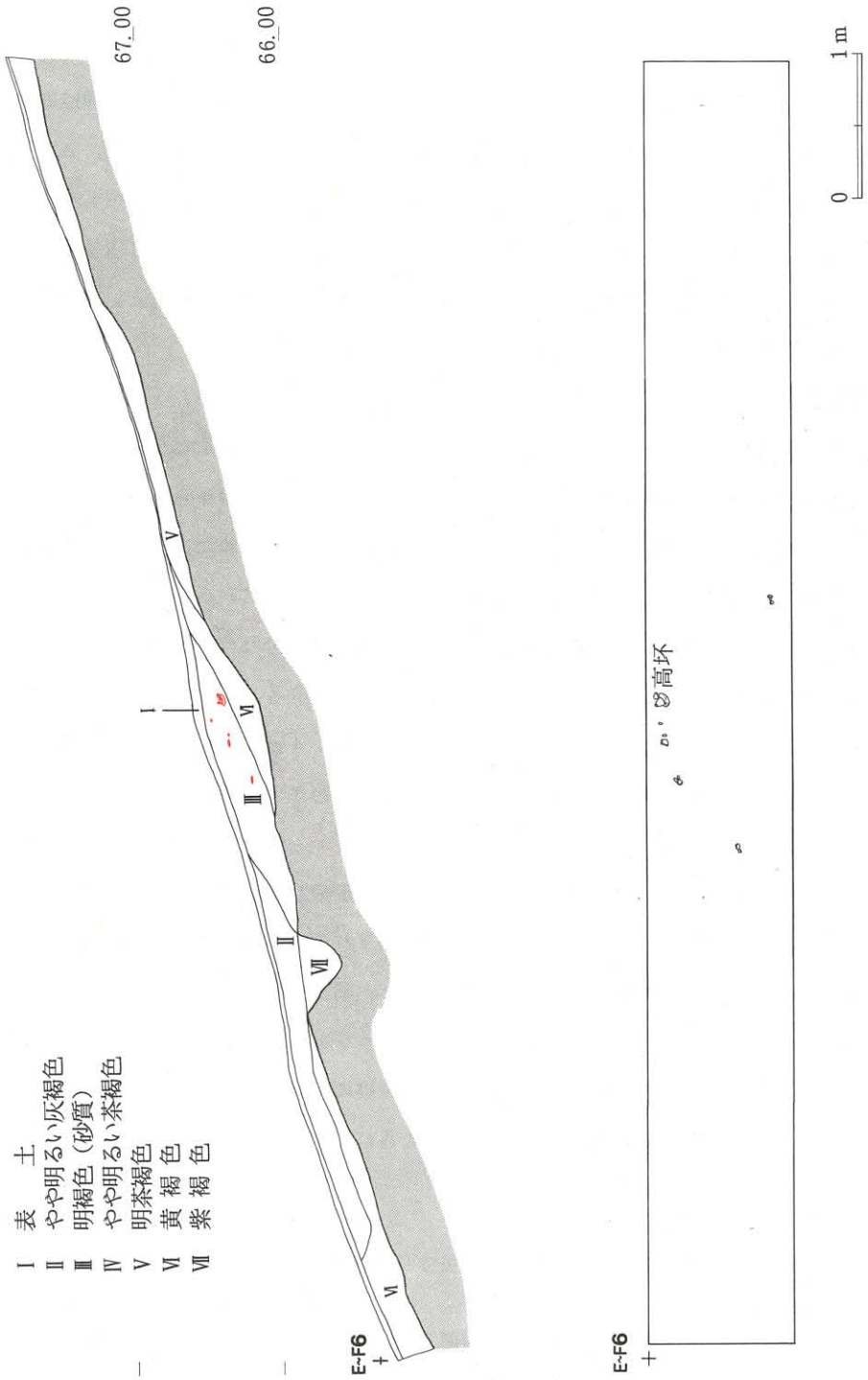


図22. Ｎトレンチ土層図及び遺物出土状況図

Ⅳ　ま　　と　　め

今回の調査で、水溜古墳群の様相の一端を知り得た。古墳群は３０基の古墳より構成されるもので宍道湖南岸域でも最大級の規模をもつ。この古墳群の中でも最大級の水溜５号墳、３０号墳が今回の試掘調査の対象となった古墳である。本文中で重ねて述べたように、発見時は５号墳と３０号墳を一つの前方後方墳と捉え、前長６３ｍの県内でも山代二子塚（松江）に次ぐ古墳として注目を集めた。しかし、一方では、この見方に疑問を持つ声も多く、遺跡保存の好例という他に、考古学上も関心のある調査であった。

調査は墳丘測量の後、トレンチ調査をおこなうもので、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｊ、Ｋ、Ｌ、Ｍ、Ｎの各トレンチから埴輪片が出土したが、他のトレンチからの出土遺物は全くなかった。そして、Ｄトレンチからは幅２ｍほどの溝が発見された。これらにより、調査の途中から後方部としていた墳丘を５号墳、前方部としていた墳丘を３０号墳と呼んで調査を進めていった。そして、最終的には、

①　５号墳からは埴輪片が出土するが、３０号墳からは全く出土しない。

②　Ｄトレンチより５号墳と３０号墳を区画するような溝が発見された。

③　５号墳の墳裾の標高と３０号墳の墳裾の標高に差がありすぎる。

などの理由から５号墳は一辺２５ｍの方墳、３０ｍは一辺約１４ｍの方墳であろうと考えている。しかし、５号墳、３０号墳は互いに意識を持たせた可能性もあり、詳細については将来の調査に待ちたいところである。

さて、５号墳からは多量の埴輪片が出土しており、墳丘築造年代を推定するのに役立った。この埴輪を観察すると、円筒埴輪と朝顔形埴輪の２種が確認されている。ほとんどが細かい埴輪片のため、全様を知り得ないが、確認できるものをみてみると、胴部に縦ハケの後、連続的な横ハケで、工具を器壁上で止めながら施したようにみえるＢ種横ハケをおこなっている。また外面に黒斑が全く認められないことから窖窯焼成と考えられる。底部調整については充分観察できないものの、これらのことより、これらの埴輪は川西編年Ⅳ期[注6]と考えられ、水溜５号墳の築造年代は５世紀中葉から後葉にかけてのものと推定できよう。

注
1. 「宍道町埋蔵文化財調査報告４」宍道町教育委員会　1985年
2. 「宍道町誌」宍道町　1963年
3. 「山陰本線玉造温泉、来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告」国鉄大阪工事局　1968年
4. 加藤義成「校注出雲国風土記」　1965年
5. 「宍道町埋蔵文化財調査報告５」宍道町教育委員会　1986年
6. 川西宏幸「円筒ハニワ総論」『考古学雑誌』第64巻２号　1978年

出土遺物観察表

挿図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
6－1	埴輪	口縁部。口唇部は指ナデ調整。外面はやや荒い横ハケ調整。内面はナデ調整か。	明赤褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	Aトレンチ
2		胴部。内面、外面ともしっかりした横ハケ調整。	明赤褐色	1～3㎜の石英を含む。	良好	
3		タガ部。タガの上部は横ハケ調整。下部はしっかりしたナナメの縦ハケ調整。内面はナナメの縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
4		タガ部。タガの上部は縦ハケ調整、下部は横ハケ調整。内面はナナメの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	普通	
5		基底部。底面は平担で一部ハケ調整。外面は、しっかりした縦ハケの後、上部は横ハケ調整。内面はしっかりしたナナメの縦ハケ調整で端部近くに指頭圧痕がある。	明赤褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	Bトレンチ
8－1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は不明。	白褐色	1～1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面上部はまばら、下部は密な横ハケ調整。	明赤褐色	1～2㎜の石英を含む。	良好	
3		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は不規則な横ハケ調整。	白褐色	1.5～2㎜の石英を含む。	普通	
4		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は縦ハケ調整。内面上部は横ナデ調整、下部はナナメの縦ハケ調整。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	普通	
5		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面はていねいな横ナデ調整。横ハケの後、左上がりの横ハケ調整。内面下部に縦ハケ調整。	明白褐色	1～1.5㎜の砂を含むが密。	良好	
6		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ナデ調整。内面はていねいな横ナデの後、横ハケ調整。	乳白色	1～2㎜の石英、長石を含む。	普通	
7		胴部。外面は縦ハケ。下部は縦ハケの後、横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。	明赤褐色	1～1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
8		穿孔部。タガを含む全体が横ナデ調整。	乳褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
9		胴部。外面全体は横ハケ調整。内面は横ハケ調整。	明赤褐色	1～3㎜の石英、長石を含む。	良好	
13		タガ部。タガは横ナデ調整。タガ上部は横ハケ調整。内面は縦ハケ調整。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
14		基底部。下端部は横ナデ調整で底面は平ら。外面、内面とも縦ハケ調整。	明白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	普通	
15		基底部。外面は不明瞭な縦ハケ調整。内面最下部に指頭圧痕がある。	明赤褐色	0.5～1.5㎜の長石を含む。	良好	

挿図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
8−16	埴輪	基底部。下端から外面下部にかけて指ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。下部に指頭圧痕がある。	白褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
17		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面はナデ調整。内面上部に工具の押圧痕がある。	白褐色	2～3㎜の石英、長石を含む。	普通	
18		基底部。下端部は横ナデ調整で底面は平ら。外面はななめの縦ハケの後、縦ハケ調整。内面は不規則な縦ハケ調整。	明白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
10−1		タガ部。外面タガ部は横ナデ調整。タガ上部、下部ともしっかりした横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整だがハケメの方向が一定していない。下部には指頭痕が見られる。	明赤褐色	1～1.5㎜の石英、長石を含む。	普通	Cトレンチ
2		胴部。外面、内面ともしっかりした縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1.5㎜の石英、長石を含む。	普通	
3		タガ部。外面タガ部は横ナデ調整。タガ上部は横ハケ調整。下部は上部より密なハケメの横ハケ調整。内面は調整不明。	白褐色	2～3㎜の石英を含む。	不良	
4		タガ部。外面タガ部は横ナデ調整。タガ下部は横ハケ調整。内面はややななめの縦ハケ調整。中心より少し下に工具痕らしい横の条線が見られる。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	不良	
5		外面、二段のタガをもつ。胴部は縦ハケ調整の後、横ハケ。内面はななめの縦ハケで、部分的に指頭圧痕が残る。	明赤褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
13−1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面はハケメの密な横ハケ調整。	明白褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	不良	Dトレンチ
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面、内面とも横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	良好	
3		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面、内面とも横ハケ調整。	明白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
4		口縁部。口唇部は横ナデ調整。上端にヘラ描きが見られる。外面はななめの横ハケ調整の後、ななめの縦ハケ調整。内面は上部がハケメの密な、ななめの横ハケ調整、下部はななめの縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1㎜の石英、長石を少量含むが密。	良好	朝顔形埴輪
5		口縁部。口唇部は横ナデ調整、外面は縦ハケ調整。内面上部は密な横ハケ調整、下部はハケメのしっかりしたななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	良好	〃
6		口縁部。外面は整った縦ハケ調整。内面は全体にななめの縦ハケ調整だが、上部に横ハケ調整も見られる。	明白褐色	0.5～1.5㎜の石英、長石。	良好	〃
7		口縁部。タガは横ナデ調整。タガ上部、下部とも規則的な縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整だが、ハケメが不整形。工具痕らしい条線も見られる。	乳白褐色	0.5～1.5㎜の石英、長石を少量含む。	良好	〃
8		口縁部。外面は縦ハケ調整だが、部分的に横ナデ調整、ケズリが見られる。内面はななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5～1.5㎜の石英、長石を含む。	不良	〃
9		タガ部。突出したタガをもつ。外面タガは横ナデ調整。タガ上部、下部とも規則的な横ハケ調整。内面は横ハケ調整。	乳白色	0.1～0.5㎜の石英を含むが密。	普通	
10		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は不明。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	不良	

挿図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
13-11	埴輪	タガ部。タガは横ナデ調整。外面はタガ上部、下部とも整った横ハケ調整。内面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。		1～2㎜の石英、長石を含む。	不良	
12		タガ部、タガは丁寧な横ナデ調整。外面はタガ上部、下部とも整った横ハケ調整。内面は不明。		0.5～1㎜の長石を含む。	良好	
13		基底部：端部はきちっとした底部調整。外面は縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整だがハケメが不整形。	明赤褐色	0.5～1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
15-1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケの後、一部左下がりの横ハケ調整。内面上部は横ハケ調整、下部は左上がりの横ハケ調整。	乳褐色	0.5～1㎜の石英を含む。	良好	Jトレンチ
2		タガ部。外面はタガを含め横ナデ調整。外面は不明。	白褐色	0.5～3㎜の石英、長石を含む。	不良	
3		胴部。外面は不明。内面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。	白褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	不良	
17-1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整、下部は後ななめの横ハケ調整。内面は不明。	明赤褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	良好	Kトレンチ
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面もななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
3		胴部。外面は整った横ハケ調整。下端部は後にななめの横ハケ調整。内面は横ハケ調整の後ななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
4		胴部。外面は整った横ハケ調整。上端部に一部縦ハケ調整が見られる。内面はななめの縦ハケ調整だが、上端部と中央部にちがったハケメが見られる。	明白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
5		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は整ったななめの縦ハケ調整。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
6		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は不明瞭な横ハケ調整、内面は不明。	明赤褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	不良	
7		胴部。外面は整った横ハケ調整、中央やや上部は後に縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。	白褐色	1～3㎜の石英、長石を含む。	不良	
8		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は横ハケ調整だが、上端部以外は荒くして不明瞭、内面は縦ハケ調整だが、中央部で工具痕らしい条線も見られる。	白褐色	1～1.5㎜の石英、長石を含む。	不良	
9		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は不明瞭な、ななめの縦ハケ調整。下部に板状工具のトメが見られる。内面は不明瞭だが指頭圧痕が見られる。	白褐色	1～2㎜の石英、長石を含む。	良好	
19-1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面、内面ともななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	良好	
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面はななめの横ハケ調整。内面はナデ調整の後ななめの横ハケ調整。	明赤褐色	1～1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
3		口縁部。口唇部は丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整だが部分的にななめのハケメも見られる。内面はややななめの横ハケ調整。	赤褐色	0.5～1㎜の石英、長石を含む。	良好	

挿図番号	器種	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
19−4	埴輪	胴部。外面は整った横ハケ調整。中央部はその後縦ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整で指頭圧痕もみられる。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	
5		胴部。外面は整った横ハケ調整。その後一部縦ハケ調整。内面はややななめの縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5〜3㎜の石英、長石を含む。	良好	
6		胴部。外面はややななめの縦ハケ調整の後、横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。	明白褐色	0.5〜1㎝の石英、長石を含む。	良好	
7		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面は整ったななめの縦ハケ調整。	白褐色	1〜2㎜の石英を少量含む。	不良	
8		タガ部。外面は整った横ハケ調整。内面は上部は荒いななめの横ハケ調整、下部は荒い縦ハケ調整。中央はナデ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	
9		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は縦ハケ調整。内面も縦ハケ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英を含む。	良好	
10		タガ部。タガは丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整。中央部から上はその後ななめの横ハケ調整。	明赤褐色	0.5〜2㎜の石英、長石を含む。	良好	
11		基底部。底面は底部調整で平ら。内面下端にかけ指頭圧痕が見られる。外面は上部が横ハケ調整。中央やや上から底部にかけては縦ハケ調整だが底部近くになるとハケメがややななめである。内面は縦ハケ調整。	白褐色	1〜3㎜の石英、長石を含む。	良好	
12		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面、内面とも縦ハケ調整。	明白褐色	0.5〜1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
21−1		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整で一部にななめのハケメがある。内面は密な横ハケ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	Mトレンチ
2		口縁部。口唇部は横ナデ調整。外面は横ハケ調整。その後一部ななめの縦ハケ調整。内面は密な横ハケ調整。	明赤褐色	0.5〜1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
3		胴部。外面は整った横ハケ調整。その後一部縦ハケ調整。工具痕による条線が見られる。内面は縦ハケ調整。	白褐色	0.5〜1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
4		タガ部。タガは横ナデ調整。外面はタガより上は横ハケ調整。タガより下は整った縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整で、その後一部ナデ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	
5		円穿部。外面は整った横ハケ調整で、その後中央部は縦ハケ調整。内面は全体的に不明瞭だが部分的にななめのハケ調整、横ハケ調整が見られる。	明赤褐色	0.5〜2㎜の石英、長石を含む。	良好	
6		円穿部。タガは横ナデ調整。外面タガより上は整った横ハケ調整、下は横ハケ調整の後一部ななめの縦ハケ調整。内面は横ハケ調整、下部はななめの縦ハケの後ナデ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	
7		タガ部。タガは丁寧な横ナデ調整。外面は整った横ハケ調整、その後タガより下の一部で縦ハケ調整。内面は縦ハケ調整の後、部分的に指ナデ調整。	白褐色	0.5〜1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	
8		タガ部。タガは横ナデ調整。外面は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整後、ナデ調整。	明赤褐色	0.5〜1㎜の石英、長石を含む。	良好	
9		基底部。底面はナデ調整で平ら。外面は縦ハケ調整、その後下部は横ハケ調整。内面はななめの縦ハケ調整の後指ナデ調整が施され指頭圧痕が見られる。	白褐色	0.5〜1.5㎜の石英、長石を含む。	良好	

水溜古墳群航空写真

図版1

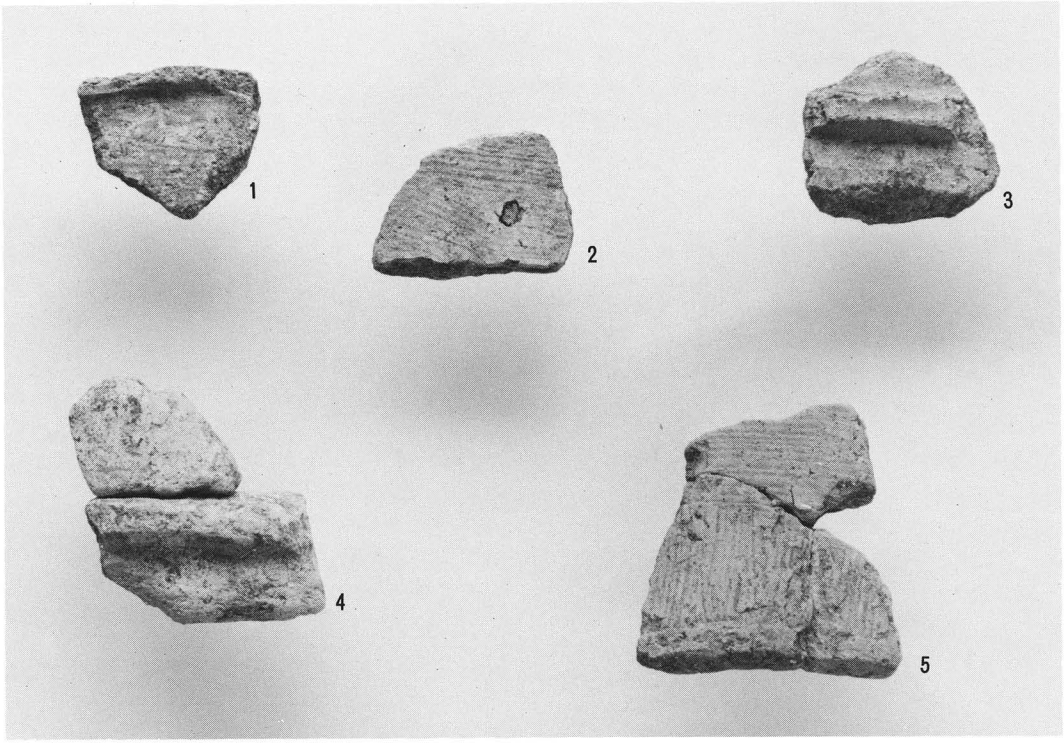
図版 2

水溜 5 号墳（右）30号墳（左）全景（南から）

図版 3

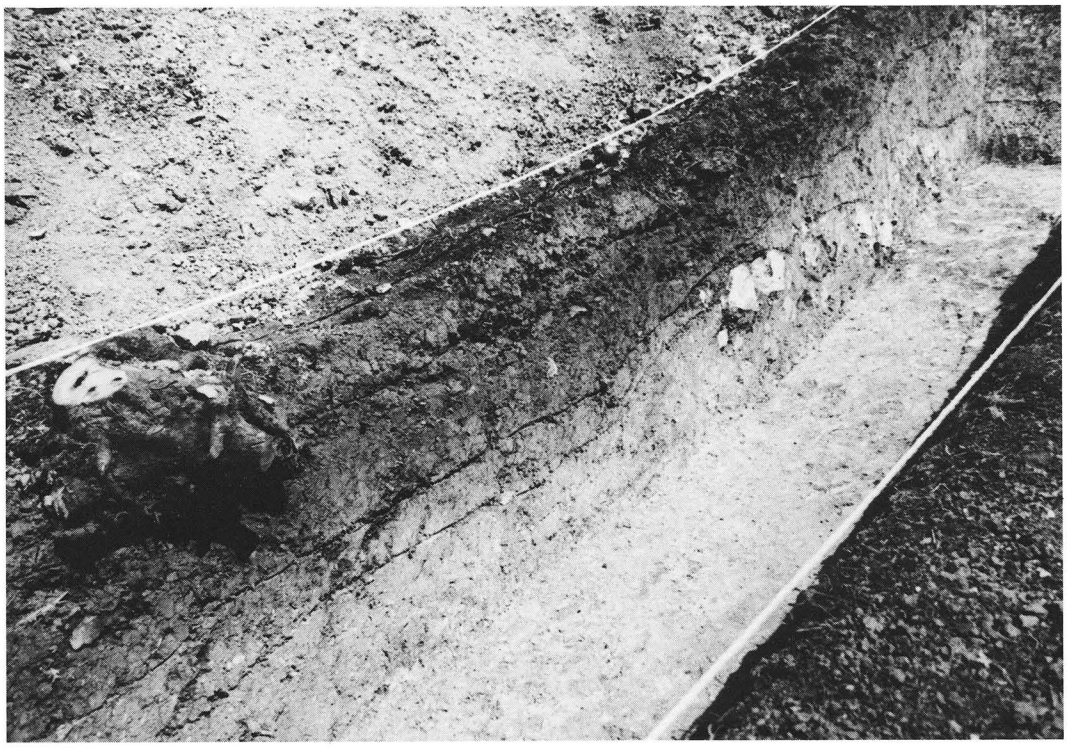
Aトレンチ調査状況（東から）

図版 4



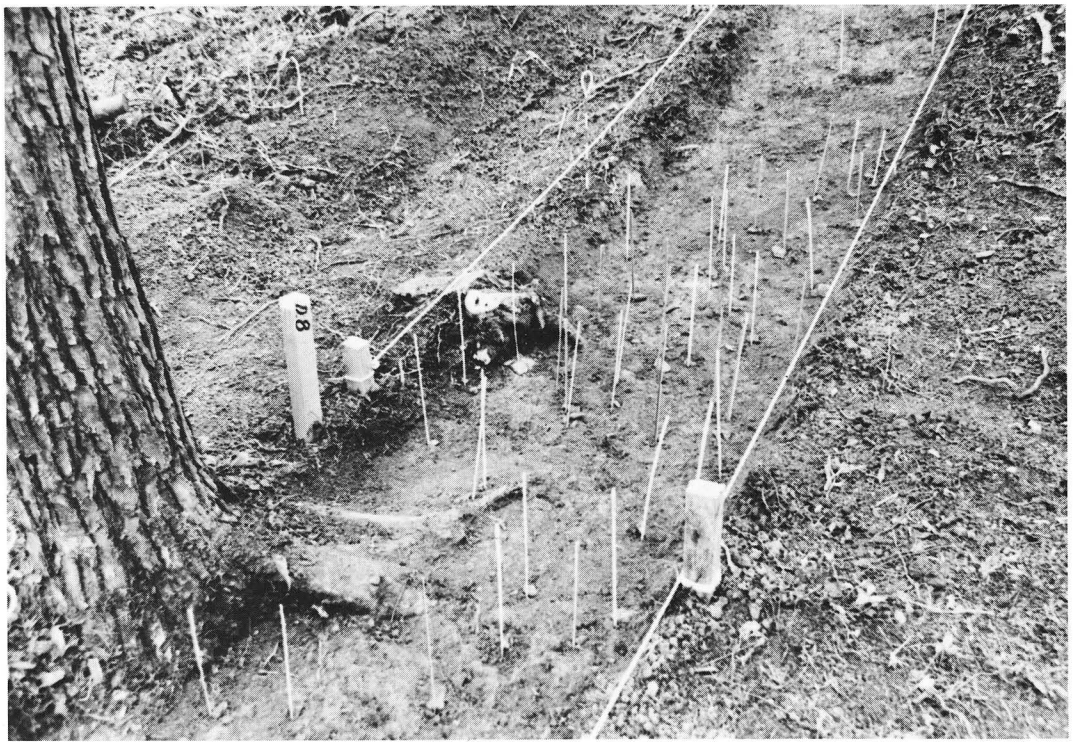
Aトレンチ出土遺物

図版 5



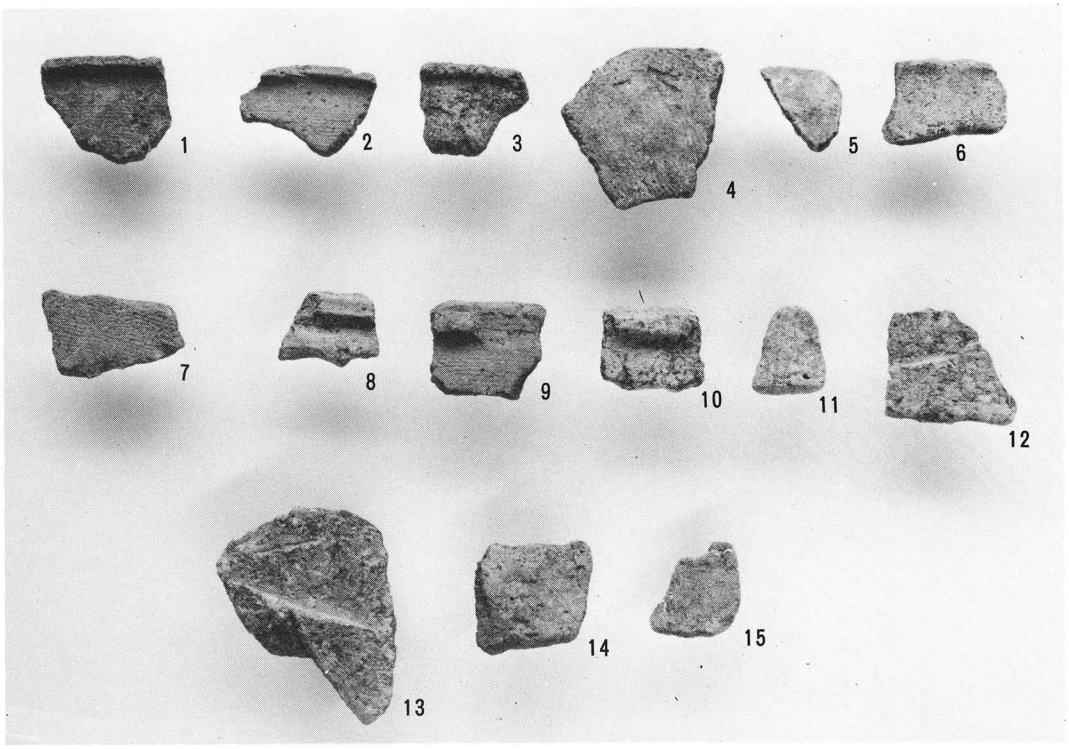
Bトレンチ層

図版 6



Bトレンチ遺物出土状況

図版 7



Bトレンチ出土遺物

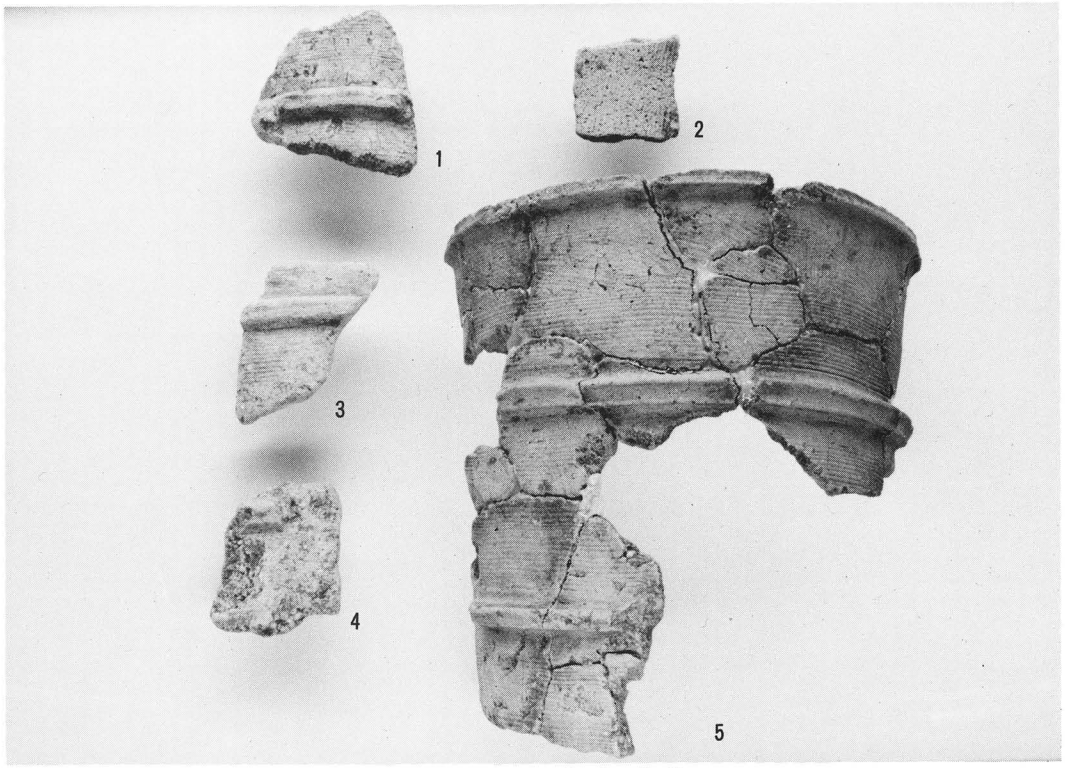
図版 8

Ｃ　ト　レ　ン　チ　土　層

図版 9

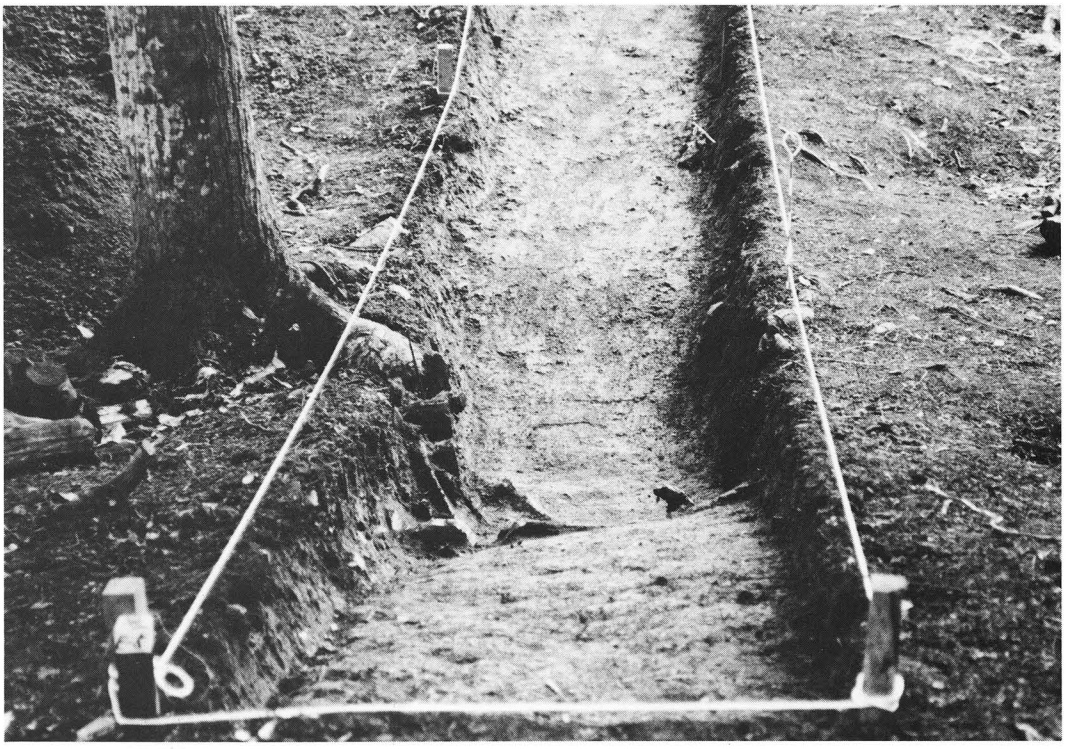
Ｃトレンチ石列（南から）

図版 10



Ｃトレンチ出土遺物

図版 11

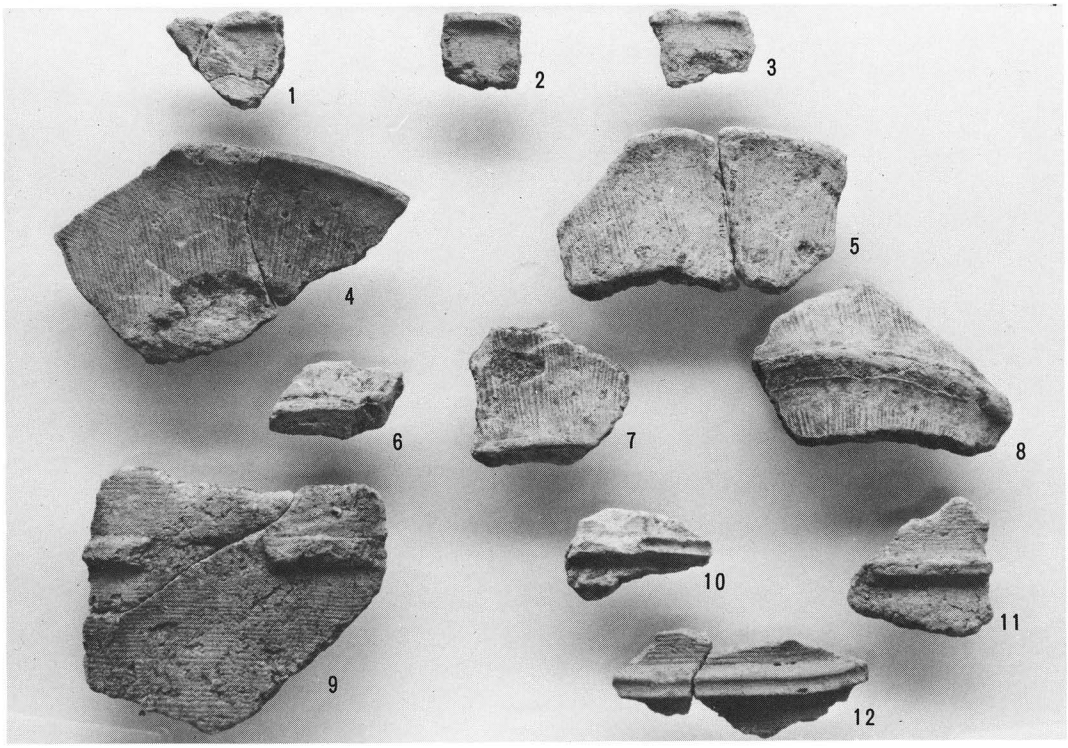


Ｄトレンチ溝（西から）

図版 12

Dトレンチ調査状況（東から）

図版 13



Dトレンチ出土遺物

図版 14

Eトレンチ調査状況（東から）

図版 15

Fトレンチ調査状況（南から）

図版 16

Gトレンチ調査状況（北から）

図版 17

Ｉトレンチ調査状況（北から）

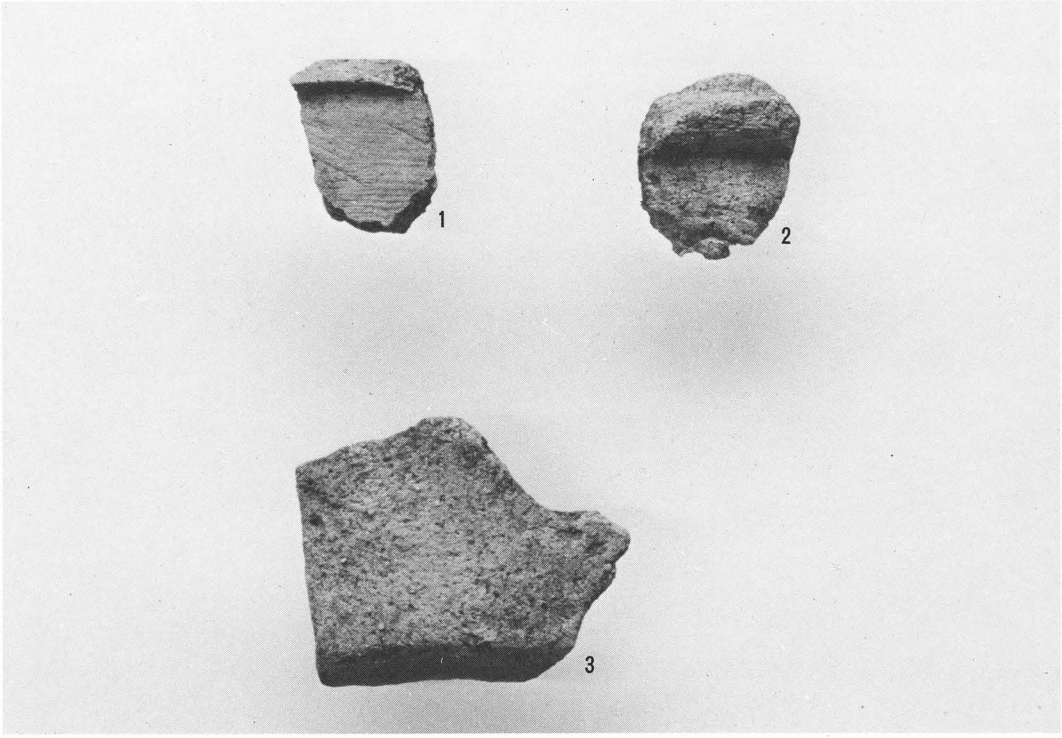
図版 18

Jトレンチ調査状況（北から）

図版 19

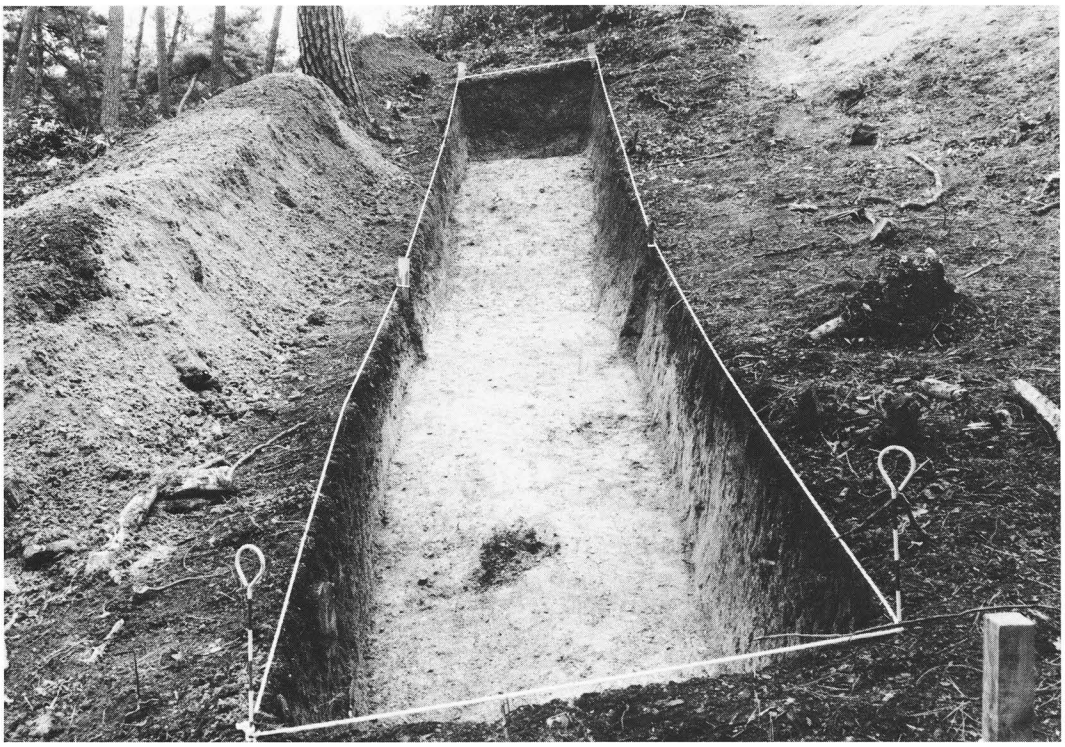
Jトレンチ遺物出土状況

図版 20



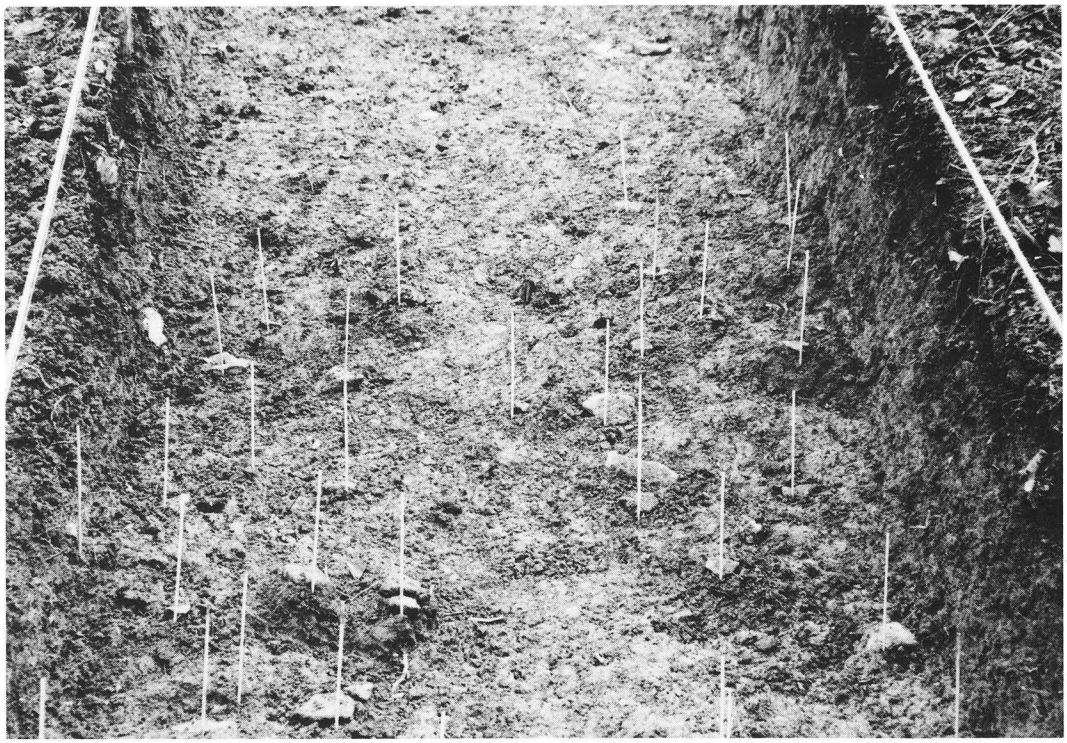
Ｊトレンチ出土遺物

図版 21



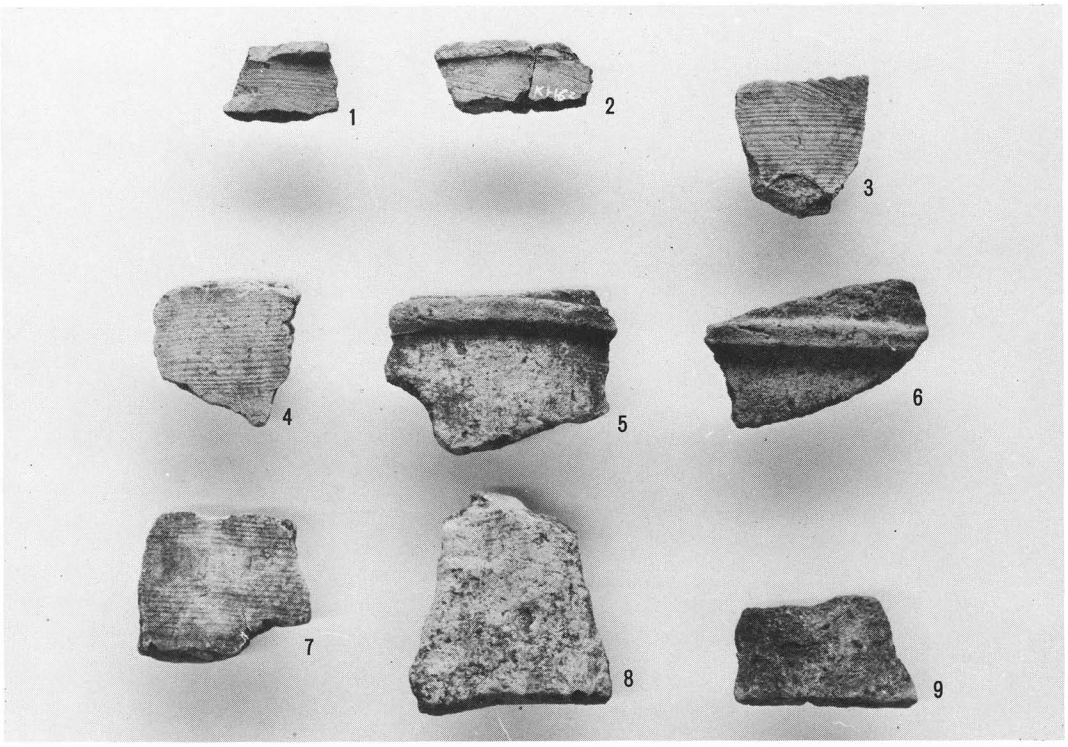
Ｋトレンチ調査状況

図版 22



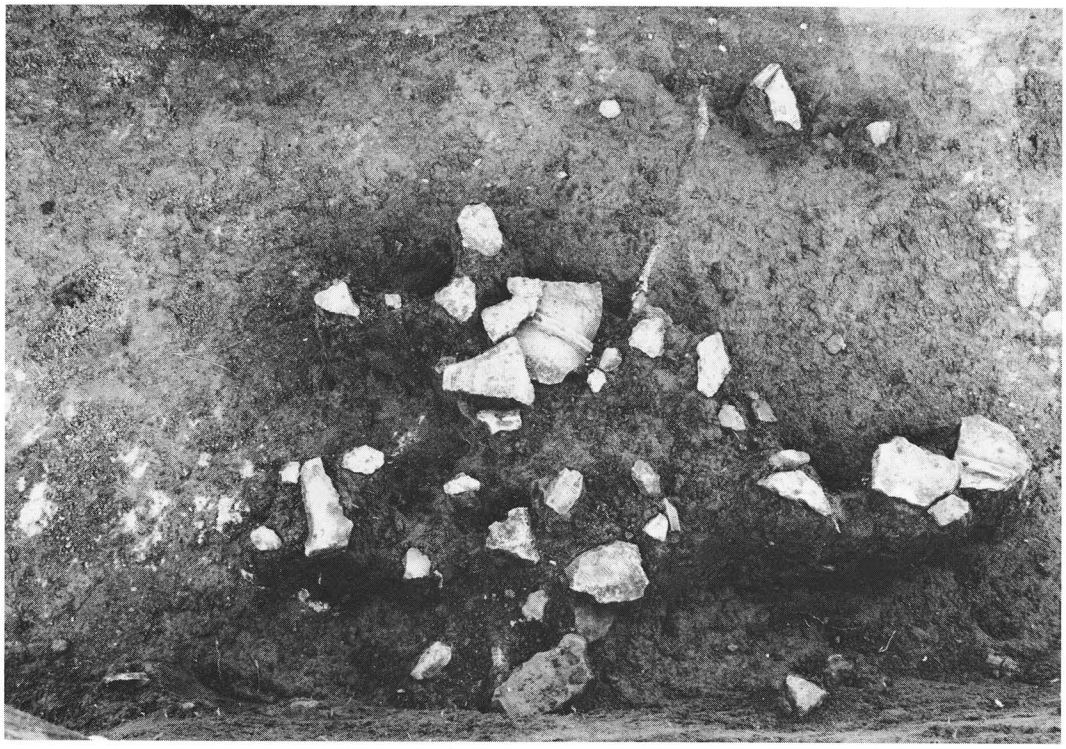
Kトレンチ遺物出土状況

図版 23



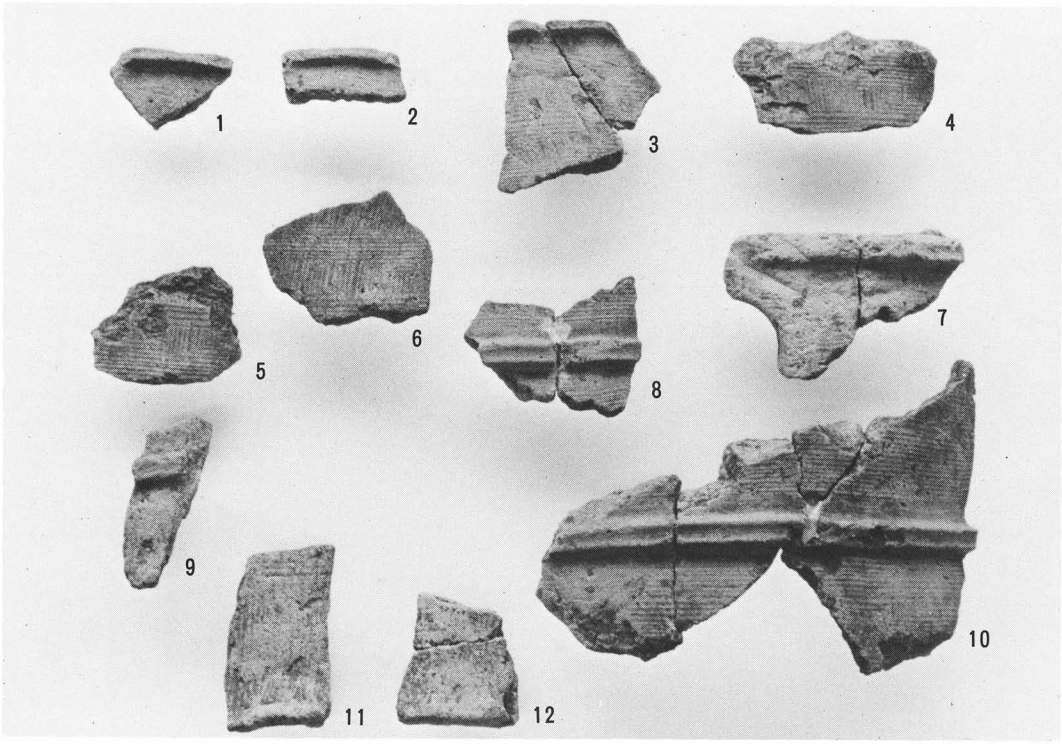
Kトレンチ出土遺物

図版 24



Lトレンチ遺物出土状況

図版 25

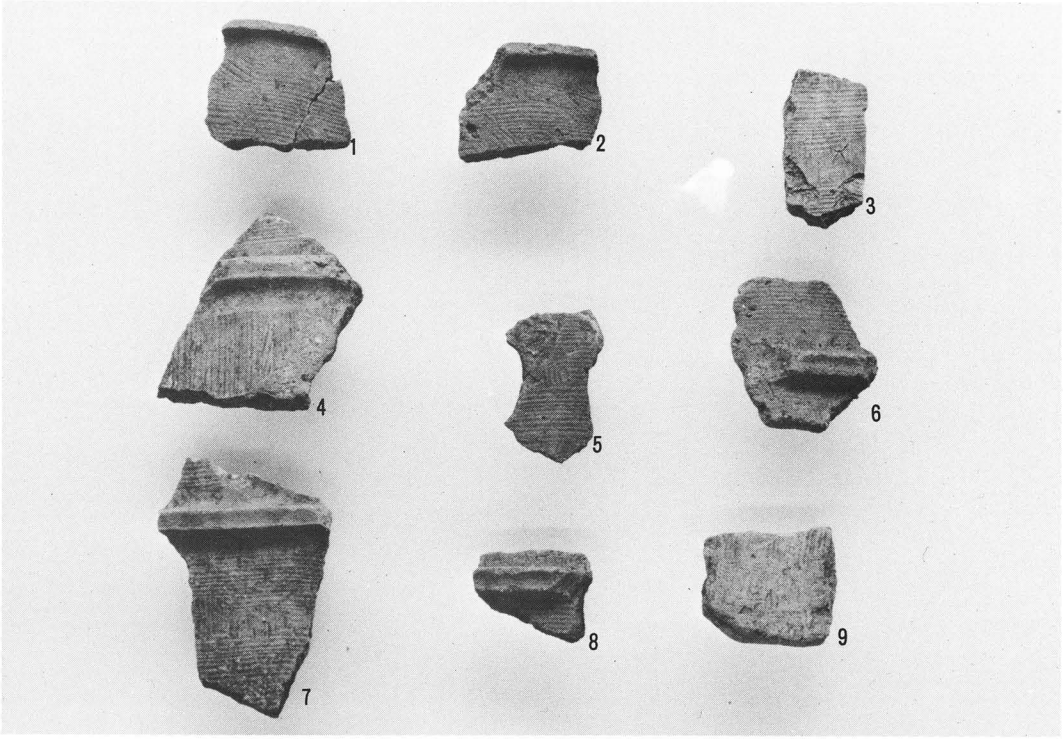


Lトレンチ出土遺物

図版 26

Mトレンチ土層

図版 27



Mトレンチ出土遺物

図版 28

Ｎ　ト　レ　ン　チ　土　層

図版 29

Ｎトレンチ遺物出土状況

Nトレンチ出土遺物

宍道町埋蔵文化財調査報告 6

昭和63年 3 月25日印刷
昭和63年 3 月31日発行

発　行　　宍道町教育委員会
八束郡宍道町大字昭和 1

印　刷　　松栄印刷有限会社
松江市西川津町 667 － 1